Laboratory Report

[限定公開!実験場 非公式リポート 第 4 号]

■はじめに

限定公開!実験場 管理人あさぎりです。
「新説/珍説ブチ上げま Show!」PDF 版を手に取っていただき，ありがとうございます。

このファイルを転載などで入手なさった方のために簡単に説明しますと，私こと「あさぎり」が管理している「限定公開!実験場」という Web サイト（アドレスは，http://www.synapse.ne.jp/mist-a/）では，機動戦士ガンダムに関連するデータベースを扱っておりまして，そこで独自に展開している，いわゆる「俺説」が，本文内でも触れている「新説/珍説ブチ上げま Show!」というコーナーです。
そして，これを独立した PDF 形態にしたものが，このファイルと言うことなのです。

「新説/珍説ブチ上げま Show!」では，とにかく「他人に対して，何かしら訴える」ことを目標としています。（詳細は，次ページの枕を読んでください。）これを読まれて，何かしら感じるところがあれば，積極的にご意見下さい。

内容については，サイト内で展開しているいつも通りの「新説/珍説ブチ上げま Show!」ですが，今回も PDF による製作を行っています。PDF 版の製作意図について簡単に述べますと，「１．文章が長くなってきたために Wiki での閲覧にそぐわない」，「２．一部内容の転載対策(**下記「注意」参照**)のため」，といった理由からこのような配布形態を取らせていただいています。
本来ならば，誰もが閲覧できる HTML や Wiki 上での編集にとどめたいのですが，かつて「意図することと全く異なった内容」で転載され，受けなくてもいい批難を受けた苦い経験から「この手のオリジナル考察に対して」行っている制限です。ご理解をお願いしたいと思います。
なお，今回から，明確にシリーズ化と言うことにしましたので，それに合わせた構成に若干修正しています。また，既存の新説/珍説も環境が整い次第，順次 PDF 版として再リリースする予定です。

内容についてはいつも通りですので，スタートの文章もいつもと同じです（笑）
ご意見等がありましたら，サイト内雑談掲示板，または Wiki 内掲示板によろしくお願いします。

※補足
Web（あるいはコンピュータ上）での閲覧と編集時の効率を考慮して，元ファイルは A4 サイズで編集していますが，実際には B5 サイズでの印刷を想定しています。PDF の印刷を行う場合，ターゲットを B5 で行うといいでしょう。
また，画稿については，投入する予定は現時点ではありません。しかし，前回の完成版について，非常にありがたい反応をいただいていますので，最終的に仕上げたものを限定配布する可能性は否定しません。（と，同時に，画稿を作成してくださる方を募集します（＾＾；）

※注意
本サイトは，元々はオリジナルの作品公開のためのサイトでした。
（現在でもその残骸は残っています（＾＾；）
公開する内容については，私だけではなく，来訪した皆さんの作品も公開するというサイトだったのです。しかしながら，無断転載や，直リンクなど妨害行為が続いたため，これらの公開を控えるようになっただけの話です。
今でもその方針を変えるつもりはありません。従って，転載防止とは謳っていますが，実際には申し出ていただければ，内容の転載については妨げるつもりは有りません。「私の論説の意図するところをきちんと伝えていただけるかどうか」だけが，転載に対する私の可否のスタンスです。実際，転載や直リンクを許可したサイトさんなどもありますので，勝手に意図しない形で転載し，苦情を受けたからって「クローズドサイト」だなんて言わないでくださいね＞某サイトさん（＾＾；

■新説/珍説ブチ上げまShow！

　このコーナーは，ガンダム世界の資料や整合性などくそ食らえ！，とにかく奇抜な（なおかつ，ある程度の説得力を持った）新説/珍説をブチ上げるコーナーです（＾＾；
　そのため，サイト内の他のコーナーと矛盾した記述も数多くあります。
　故に，俺説度は他のコーナーの比ではありません（w
　信じる/信じないはあなたの自由です！（笑）

　本コーナーは，ご覧になった方の意見を取り入れ，よりいっそうのバージョンアップを行っていきます。説の本筋を変更しない（ここがポイント。説の本筋を変更した場合，他のサイトなどの意見と変わらなくなるでしょうから＾＾；）様な，補完意見は次々取り入れていきます。

PDF 版追記：
　今回の考察は，PDF 公開であるため，脚注をページ下部分に切り出す方法をとっています。前回の考察では，その都度手作業で編集していましたが，今回は，編集に用いている「一太郎」の持つ機能で試しています。この脚注に関しては，未だ試行錯誤の段階ですので，しばらくは色々な形を試してみたいと思います。
　また，各種用語については，サイト内コンテンツの「**ガンダム用語の〔似非〕知識@ Wiki**」（http://gudamer.sakura.ne.jp/）を参照していただけると，より詳細な記述が存在することもあると思います。

[註]
　次ページよりの本文は，一部砕けた論文調でまとめてあります。
　また，主眼となる視点を未来の宇宙世紀という観点（著者未定）で置いているため，他のガンダム世界の話題については触れていません。（ただし，脚注に関しては筆者「あさぎり」のフォローという観点でまとめてあります。）

part.06 ： 珍説 RX-78 系列論

■はじめに

1979 年に放映された TV アニメ「機動戦士ガンダム」は,「一年戦争」という架空の戦史物の中で,「アムロ・レイ」という一人の少年をカメラが追いかけることで,TV アニメとして成立していた。
この作品において登場したロボット，すなわち，モビルスーツは，従前のロボットアニメと比して，様々な差違が存在している，という点はこのリポートをご覧になっている方には，語るまでも無いだろう。
特に，主人公アムロの搭乗する，「RX-78 ガンダム」[#1]は，いわゆるロボットアニメの主役ロボでありながら，それまでのアニメでは無かった「兵器」としての描写も存在していた。無論，当時という時代がさせることもあり，ガンダムには「スーパーロボット的」な描写も存在していることは間違いないのだが，この「兵器」としての描写は，放映終了後に「ガンプラ」[#2]というアイテムのヒットにより，より一層大きくクローズアップされてくることになったのである。

さて，その「機動戦士ガンダム」であるが，ガンプラのヒットの中心となったモビルスーツに関する様々な情報は，テレビ放映時に情報として提示された物ではなく，そのほとんどが放映後に様々な媒体を通じて我々視聴者側に提示された物である。（このことは，この文章を読んでいる人には既知の事実であろうが。）様々なアニメ誌や模型雑誌などでアニメに関わる様々な設定が触れられ，中には作中に登場すらしていない事柄まで触れられるようになっていたのである。

ガンダム放映以前に大ブームを巻き起こした「宇宙戦艦ヤマト」においても様々な設定の存在は公開されており，実際にアニメ誌ではそれらを利用して記事を作成していることも多かった。しかし，ガンダムではこれが一歩進んだ形で世に現れることとなるのである。すなわち,「裏設定」や「考察」[#3]といった形で記事が作成されることとなったのである。（もちろん，当時のアニメ誌などでこういった実際には使用されなかった設定などが触れられることは有りはしたが，そこまで含めて「世界観」としての設定構築が行われたのは，事実上ガンダムが初であったのである。）

本リポートでは，主役メカである「ガンダム」における「型番」（あえて，型式とはしていないのは，後々判ってくると思われるので，この導入部では触れないこととする）についてまとめてみたいと考えている。

なお，本リポート枕部分の繰り返しになるが，この論説はあくまで筆者の独自の考え方である。様々な様々な解釈を行っているが，一般的ではない解釈を行っている部分も存在している。
内容について掲示板等（サイト内雑談掲示板，あるいは Wiki 内掲示板どちらでもかまわない）でのご意見，ご感想等，また，誤りの指摘は歓迎するが，「通説だから間違い」という思考停止的な指摘は，スルーすることが多くなると思われるのでご了承いただきたい。
また, 筆者が引用している資料以外で, 様々な「考察内容に影響を与えそうな」資料を所持している方には，それらのフォローもお願いしたい。（本論が，根底からひっくり返るような資料があればなおさらである。筆者個人が，納得がいかない部分を納得できる解釈があれば，非常に嬉しい限りである。）

なお，本リポートは一部非常に入手困難な資料が用いられている部分もある。しかし，基本的には比較的入手の容易な資料を中心に編集を行っている。これは，比較的新しめの資料の方が，様々な解釈がなされた後の「（相対的な）統一見解」に近い状態のものであると考えられるからである。その上で，独自解釈を加えて展開した物が本稿である。
無論，これらの資料を中心に「別の解釈」を行うことは可能ではあるが，そういった部分からの「別の解釈」を行った物に関しては，また「別に提示する」こともあるだろう。

とはいえ，本稿の内容については，これらの資料の「解釈としては成立する」と思われるので，これを元に「否定する部分」,「拡げていく部分」を提示いただければ幸いである。

[#1]
蛇足ながら，放映時には「RX-78」という型式は存在していないので念のため。

[#2]
ガンプラについては，Wiki 内「ガンプラ雑記」を参照のこと。

[#3]
「裏設定」や「考察」という言葉で実際に使われるようになったのは，これ以降の時代ではあるが，作中に登場していない様々な設定や，アニメ誌独自の解釈などが様々な形で登場したのが，ガンダムという作品の特徴である。
これらのアニメ誌発の設定なども現在では多くが公式やそれに準ずる形で取り入れられているのである。

■参考資料

前節末文で触れたとおり，本リポートは比較的入手が容易い資料を中心に編纂を行っている。しかしながら，入手困難な資料も多く存在していることもまた事実であり，それらに関しては，Wiki の項目で引用されている部分などを参考にしていただきたい。

なお，ここに提示された資料が本リポート編集の全ての資料ではないことを先にお断りしておく。多くの映像作品や雑誌等の記述もまた参考にはなっており，それらの解釈も用いられていることは間違いないからである。（というか，正直言えば，どの資料のどの部分が参考になっているのか，現在でははっきりと明言できない状況だからである。）
従って，ここに提示されている資料は，本リポートを構築する上で，非常に重要な役割を果たした資料ということでまとめた物である。その点は，ご理解いただきたい。

1):模型・玩具関連資料
基本的に MSV 関連のインストラクションは，資料として用いている。また，MG 関連のインストラクションも資料として利用しているため，ここに提示した物以外でも利用した資料は多い。

・1/144 MSV プロトタイプガンダム組立説明書
・1/144 MSV フルアーマーガンダム組立説明書
・1/144 HG ガンダム組立説明書
・1/100 MG ガンダム組立説明書
・1/100 MG ガンダム NT1 組立説明書
・1/100 MG 陸戦型ガンダム組立説明書
・BB 戦士 フルアーマーガンダム組立説明書
・BB 戦士 ガンダム NT1 組立説明書
・RX-78-1 限定配布版メカニカルファイル
・1/144 FA-78-1 同梱メカニカルファイル
・その他多数

2):書籍類
書籍類は，ほとんどが本論展開のため資料としてチェックに用いた物であり，実際には，署名を控えることなく用いたものも多い。
ここでは極めて一部のみの提示となっている点をご了承いただきたい。

・ガンダムセンチュリー
・MS 大全集 98/2003/2006
・GUNDAM OFFICIALS
・SD クラブ（切り抜き多数）
・EB MS 大図鑑関連
・ガンダムヒストリカ 5 号
・GUNDAM FACT FILE
・他多数

■導入

◇ 0-1:ガンダムと型式番号

TV 版「機動戦士ガンダム」に登場したモビルスーツ「ガンダム」に関しては，劇中登場の機体は，1 機であることは間違いない。しかしながら，番組放映時から，既に「ガンダム」が複数存在することは匂わされていたのである。[#4]実際，放映時，画面上ではガンタンク，ガンキャノンなどのパーツが複数登場し，それらがザクの攻撃によって破壊される描写が挿入されており，主役メカであるガンダムですらそういった機体群の一つに過ぎないという解釈はなされていたのである。[#5]

TV 版の放映終了直後から，徐々に「ガンダム人気」が高まった事による，様々な媒体展開が行われ，富野由悠季（当時は「善幸」名義）監督による小説版では，TV 版とも異なったオリジナルの展開が行われるまでになっていた。
そして，この小説版ではアムロはガンダムを乗り換えており，主役メカであるガンダムですら，代替機が存在するということが作中で描かれているのである。（さらにいえば，それ以前のロボットアニメ関連ではほとんど有り得なかった，主人公メカの「破壊」についても描かれている。これは，アニメ版でも最終話で描かれていたわけであるが，ストーリーの最中に主人公メカが破壊されるというのはかなり珍しいことであろう。蛇足ながら，この描写がのちの戦闘メカ ザブングルにおける主役交代に繋がっていると筆者は考えている。）

一方，アニメ誌でも様々な特集が組まれており，中でも OUT，アニメックの特集は，他誌（といっても，当時他に存在したアニメ誌は，アニメージュとアニメディア，ジ・アニメだけではあるが…）を上回る密度で展開されていた。アニメージュやアニメディア（これは厳密には劇場版のころの創刊である）の特集が主にストーリー展開に絞った物であっ

[#4]
これは番組の企画案であったガンボイの時点でもすでに触れられている。

[#5]
この点に関しては，主役メカは 1 機という当時の風潮に作品展開によってうまく持ち込んでおり，脚本（というか，描写か？）の妙ともいえるのではないだろうか。
（実際の所，なぜ 1 号機がザクの攻撃で大破したのか，といった問題点はあるのだが，脚本的にほとんど問題になっていないということなのであろう。）

た（実際，アニメージュではストーリー展開に合わせた別冊が刊行されていた）のに対して，この先述の 2 誌はどちらかといえば，設定面での充実を目指した展開が行われていたのである。

そしてこの流れから，設定面の充実と補足を行うという流れになり，アニメックの特集において，ついに「RX-78」という型式番号が，提示されるに至ったのだ。さらに，OUT では，当時のガンダムに関係したスタッフ等が刊行した同人誌をベースに，「ガンダムセンチュリー」という，後の世にバイブルとして扱われる書籍を刊行するに至った。[#6]
結果的にこの 2 誌の展開した記事や別冊が，現在のガンダム関連の基本となる設定群を生み出したといっても過言ではないのである。

多少脱線したが，これらのアニメ誌などの特集記事によって，ガンダムに型式が与えられ[#7]，様々な設定が付け加えられ，現在の考察のベースとなる設定となっているのである。つまりは，現在の様々な設定の多くが「後付け」なのである。

例えば，アニメックの特集では，ガンダムに「RX-78」という型式が与えられ，他の MS にも同様に型式番号が与えられたのだが，これをさらに発展させたのがガンダムセンチュリーである。センチュリーでは，「枝番」処理することで，バリエーション展開を念頭においた記事となっている。そして，公式媒体[#8]であるガンプラにもこの流れがフィードバックされ，1/100 で展開されたリアルタイプシリーズ[#9]では，ボックスに型式番号が入れられるようになったのである。こうして型式番号とバリエーションの関係が受け入れられていき，ついに「映像媒体を持たない」ガンプラ，MSV シリーズが展開されたのである。

そして，MSV シリーズの中で，ついに「アムロのガンダム」以外のガンダムが明確な形で登場したのである。

MSV シリーズでは，そのインストラクションに様々な解説を掲載することで，映像媒体を持たないことによる不利を補っていた。このインストラクションでは，アニメックで設定された型式などの情報とガンダムセンチュリーで提示された設定などをさらに発展させた情報が掲載されており，ここにおいて「ガンダムが複数存在する」ことが明確にされたのである。
初めて登場した「アムロ機以外のガンダム」であったプロトタイプガンダムのインストラクションでは，「生産されたガンダムは 8 機」であったという記述であった。この記述は，センチュリーの記述がベースであると考えられ，以後，「ガンダムの生産数は 8 機」が定説となった。

MSV シリーズにおける「他のガンダム」，すなわち，フルアーマーガンダムについては，計画は存在していたが，実機の存在については疑問点が提示され，また，パーフェクトガンダムに関しては，その出仕もあり，存在そのものに対して疑問符が付けられるような形で解説されたのである。この流れは，続く TV アニメ「機動戦士Ｚガンダム」（以下，「Ｚガンダム」），「機動戦士ガンダムＺＺ」（以下，「ガンダムＺＺ」）においても同様であり，MSV の設定の系譜上の RX-78 型以外は登場することは無かった。[#10]

しかし，MSV からおよそ 5 年後に製作された OVA「機動戦士ガンダム 0080 ～ポケットの中の戦争」（以下，「ポケ戦」）において，ニュータイプ専用ガンダム，ガンダム NT-1 アレックスが登場し，一年戦争時の RX-78 型で初めて MSV で触れられた

[#6]
実のところこのセンチュリーがアニメックではなく，OUT の増刊である，という点に違和感を持っていた人も少なくない。

[#7]
これを読んでいる人には既知の事実ではあろうが，実際には放映当時からガンダムに型式を与えているのである。「ガンダー X78」というものがそれであり，当初からそういった面は考慮されていたのである。
しかし，実際に日の目をみなかった設定であり，これを発展させたのがアニメックの特集なのである。

[#8]
ここでいう公式媒体というのは，「バンダイ公式」である。
サンライズにとって，Z ガンダムが放映されるまでは，MSV は準公式にすぎなかった。

[#9]
このリアルタイプシリーズでは，ボックスに型式番号が記載されており，以降 MS のプラモデルでは(設定されている限り)型式番号が併記されるようになる。
なお，蛇足ながらリアルタイプゲルググでは，設定が固まっていなかったこともあり，現在とは異なる「MS-11」が型式として表示されている。（これがその後の考察材料となったのは知っての通りである。）

[#10]
ただし，この頃既に模型誌でのオリジナルガンダムの製作はかなりの頻度であり，ホビージャパン誌の Z ガンダムの別冊には多くのオリジナルが登場していた。続くモデルグラフィックス誌の別冊でも同様であり，この時代の風潮ということはできるだろう。（この流れに対する一つのアンチテーゼとして「ガンダムセンチネル」は登場しているのだが，この件については，Wiki のガンプラ雑記を参照のこと。）

機体以外の「ガンダム」が登場したのである。

逆に言えば，このアレックスの登場によって一年戦争時におけるガンダムタイプ MS の迷走が始まったと言っても過言ではないだろう[#11]。

アレックスは，当初ガンダム 4 号機として設定されたといわれて[#12]おり，実際，そういった資料も数多く目にすることが出来る。（同時に，当初はポケ戦に登場する MS は，ケンプファーを除き，全て既存の MS のリファインとして当初画稿は起こされている。すなわち，MS-06FZ については，あくまで MS-06F であったのだ。）しかしながら，実際に OVA が販売される頃には，各種設定が固まっており，登場した MS は，全て「既存の機種のバリエーション」として設定されたのである。[#13]
無論，アレックスも例外ではなく，「ガンダム 4 号機」ではなく，「NT 型」という新たなカテゴリのガンダムとして設定されたのである。

この設定の変遷は，当初ポケ戦のスタッフが，ガンダム 4 号機以降の機体の設定について，（厳密に言えば，MSV について）曖昧な状態で設定作業に入っていたためといわれている。これは，ある意味当然であるといえる。
というのも，元々ガンダムについては，フィルムが公式というスタンスがあり，MSV については，バンダイが権利上で展開したオリジナルシリーズに過ぎず，Z ガンダムにおいて，MSV の機体を（バンダイ側からのリクエストと言われている）登場させたことで，初めて公式化したとされているのである。こういった状況であるため，MSV で追加されたそれぞれの機体解説をサンライズ側のスタッフが熟知しているとはいえず，センチュリーの編纂に関わったかつての TV 版ガンダムスタッフですら知り得ない情報が追加されていたりしたのである。[#14]
このあたりの事情は，実は MS だけではなく登場したペガサス級の名称変更にも現れているのである。[#15]

また，このポケ戦発売の 1989 年の後半には，SD クラブにおいて，「大河原邦男モビルスーツコレクション」(後の M-MSV)が展開され，ここで改めてガンダム 4 ～ 7 号機が設定されたことにより，さらに混乱に拍車がかかることとなったのである。
この 4 ～ 7 号機は，それまで提示されていた 4 号機以降のガンダムに関して，問題となる部分を如何様にも解釈可能な解説文とともに提示されたため，結果的に様々な説が氾濫することとなったのである。

そして，後年 OVA「機動戦士ガンダム第 08MS 小隊」が製作され，ついに「量産型ガンダム」（詳細は別項に後述[#16]）が登場し，フィルム上でも多数のガンダムが登場するに至ったのである。
この結果，M-MSV で混乱をきたしていた型式番号問題がさらに混乱することになったのである。

[#11]
当時から既に非公式作品ではオリジナルガンダムが登場してはいたのだが，公式にフィルムとして起こされた一年戦争時のアムロ機以外のガンダムとしては，アレックスが初めてであり，78 型の迷走はアレックスで始まったと結論付けて問題ないだろう。

[#12]
実際には，当初 3 号機として設定されていたが，すぐに 4 号機として修正されている。だが，この 4 号機という考え方も，MSV との兼ね合いで，取り消されるのである。

[#13]
これには様々な説があるが，バンダイ側の販売上の理由と，そのデザインが余りにも元のラインと異なっていた点もあげられるだろう。

[#14]
このあたりは，ストリームベースの功績が大きいと言え，逆に言えば，ストリームベースの活動が模型誌側に限定されていたことから，設定の齟齬が起こったといっても過言ではないだろう。
現在のようにサンライズ設定課が中心となり，各所と整合性をとっているような形ではなかったのである。

[#15]
既存の資料を紐解くと，ガンダム 4 号機については，明確な記述は存在していない。しかし，1989 年に発売されたポケ戦の設定作業の時期は，おそらく後の M-MSV の設定作業の時期と多少なりとも重なっていた可能性は否定できない。そのため，4 号機の設定を慌てて変更したという感じに受け取れる。さらに，この MSV に対する情報の齟齬は，本文中でも触れているペガサス級にも現れているのである。登場するペガサス級は，当初「トロイホース」という艦名であるが，この艦は一年戦争では実戦には参加せず，輸送任務に就いていたという設定なのである。
つまり，MSV から「トロイホース」という艦名を拝借したのだが，その設定についてはきちんとした情報が設定スタッフ側に無かったということだと考えられる。そのため，「グレイファントム」という艦名に変更されたのであろう。

[#16]
何故「量産型ガンダム」から「陸戦型ガンダム」に変更されたのか，については，アレックスと同様の理由である。

◇ 0-2:考察の現状と問題点

前項のような経緯で「ガンダム」の増加と，型式番号の混乱が生じていたわけであるが，当初から様々な形でこれらの設定解釈は行われていた。
同人誌という形での公開がほとんどであったが，とくにインターネットが本格的に普及し始めた，1997 年頃から Web 上で独自の設定考察を公開する人たちが多く現れるようになったのである。（筆者も，同人誌で俺ガンを公開するための一つの指針として俺説を展開していたが，1999 年に現在のサイトの元となるサイトを立ち上げ，2001 年から現在のサイトで公開している。）

そういった説を公開する作者の中には，閲覧者の大きな支持を受け，かつてのガンサイトの様に，一般的なコンセンサスを得てしまうような人も登場してきたのである。さらにそういった人たちの中から，実際の「ガンダム作品」の製作に関わるような人たちも現れてきた。
現状としては，Web 上での考察に関して，厳密な意味での正当性は無い[#17]。しかし，閲覧者の同意を受けられるような説であれば，それがネット上での定説になる可能性が高くなっている。そういった意味では，我々ユーザー側からの提示が，かつてのガンダムセンチュリーの様に，逆提案の形で取り入れられる可能性もあるということなのである。（無論，そういった状態になるにはそれ相応の説が必要であるが。）

様々な説が Web 上で公開され，筆者も気になる考察は色々と参考にさせていただいている。だからといって，その説をそのまま取り入れていってしまうのでは面白くない，というのが筆者のスタンスであり，多少暴走しようとも「内容として面白ければ有り」というのが，「新説/珍説ブチ上げま Show ！」である。
筆者の暴走に関して，同意できる面，出来ない面があるとは思うが，「隙間を突いた」解釈というものは，こういった物であるという一つの例として受け取ってもらいたい。無論，この考察は，筆者一人の物ではなく，掲示板などで意見のやりとりを行った数多くの方々の意見でもある。（巻末 Special Thanks 参照。）

一つの提示から，こういった新たな考察が誕生する……，これもまた Web 時代の考察の現状だと思うのだ。

さて，話題を RX-78 関連に戻そう。

現在，RX-78 関連の考察に関しては，様々な書籍類でも型式番号と仕様の関係について，様々な考え方が提示されている。
大きく分けると，「型式番号＝仕様説」と「型式番号＝機番説」である。一言で言ってしまえば，「前者有利で後者不利」であるのだが，それによって「型式番号は仕様を表す」と単純に結論づけることが出来ないのが，この RX-78 関連の問題点である。実際，様々な初期の記述類を読み解くと，既にその時点から，型式番号を仕様とも機番とも受け取れる記述が存在しているのである。

例えば，現在では型式番号を仕様として解釈する場合に重要な記述である 1/144 プロトタイプガンダムのインストラクションの記述であるが，この記述こそ最初にガンダムのバリエーションについて触れた解説文であるわけだが，実は，「初期試作型」，「中間装備型」，「後期試作型」という形での解説がなされているだけであり，これが RX-78-1 ～ 3 を指すという記述は一切なされていないのだ。（実は，この点は，非常に重要なのである。）
このインストラクションの記述を発端に様々な書籍や考察などで，RX-78-1 ～ 8 の枝番に関しては，仕様を表すという解釈が通説となったわけであるが，記述からすると，最低限上記の「仕様」と型式番号については，別物であるとしなければならないのである。（詳細は，考察本文中で触れる。）

無論，通説である「型式番号＝仕様説」を否定するわけではないのだが，筆者個人としては，完全に納得がいっていない部分が上記のような理由で存在するのである。

まず，第一に引っかかっている部分が，未だもって「8 号機」の存在が明らかではない点である。一時，RX-78-8 という型式（この場合，実質的な機番だが。これは後述する）を見ることがあったが，その辺りの解が未だ見あたらない部分に関して微妙に引っかかっているのである。（なお，この 8 号機に関しては，単に未発表と一刀両断してもいいのだが，それだけでは考察としておもしろみがないと感じている。すなわち，「未発表の理由」を考えるのもまた一つの楽しみ方だと思うのだ。）

そして，第二の引っかかりが，枝番が仕様番号だとした場合，何故改修点の多い 4 号機の型番が，ほぼ同型の 5 号機より若いのか，という点である。
他にも細かい部分では，色々とあるのだが，大まかにまとめると仕様説には以下のような問題点が存在すると考えられる。（繰り返しになっている部分もあるが，論説中の記述なのでご容赦いただきたい。）

[#17]
Wikipedia **の該当項目を読んでも編集者の考えとして述べられているに過ぎない記述も見受けられるため，それが全て正統であるとは言えないのである。（**Wikipedia **のガンダム関連の項目を見てもらうと判ると思うのだが，公式/非公式の区別を付けずに記述を行っている項目も多い。本サイトでは筆者の考え方で分類を行っているが，正当な物は，敢えて言うならば公式サイトだけであろう。**

●単純に型式＝仕様とした場合の問題点

［１］
8 号機の存在はどうなったのか，又，その仕様はどのような形だったのか?
（かつて見られた RX-78-8 というナンバーは，何故近年見られないのか？）

［２］
何故 4 号機の方が，仕様的には古い番号の機体であり，当初完成しながら，さらに改修されていたのか？
（冷却フィンの形状が異なるのは，ジェネレータの出力アップに伴う，冷却装置の改修の結果とされている。ならば，ジェネレータの改修前は，5 号機と同型だった可能性も残るのである。つまりは，RX-78-5 から RX-78-4 に改修された，という形になってしまう。）

［３］
上記に絡んで，何故，4，5 号機は似た仕様でありながら，別形式を振られているのか？
（それこそ，RX-78-4A，RX-78-4B といった型式になると考えられるのだが……）

［４］
あれだけ形状の異なった 4 〜 7 号機が，他の RX-78 型の様に, アルファベットによる分類（78NT1 などのように，78B，78C といった区分）にならなかったのは何故か？[#18]

以上の 4 点が，筆者として「型式=仕様」と単純に決定づけることが出来ない理由である。

逆に「型式＝機番説」をとった場合，次のような問題点が存在する。

●単純に型式＝機番とした場合の問題点

［１］
8 号機の存在はどうなったのか，また，その仕様はどのような形だったのか？
（実は，この問題は機番説でも同様である。）

［２］
1 〜 3 号機の改修経緯を見ると，同じ型式の機体が複数あるように受け取れてしまう。（これは，プロトタイプガンダムのインストラクションの解釈によるのだが，塗装チャートなどから否定することは難しい。）

［３］
各作品の描写は異なるのだが，4 〜 5 号機は，M-MSV の機体と後のゲーム登場の機体が同一と考えられる。しかし，6 号機に関しては，M-MSV の機体とゲーム登場の機体を同一機とするには情報が不足している。つまりは，同じ型式の機体が複数存在する可能性が残る。

［４］
実戦に投入された可能性が指摘されている 4 〜 8 号機のうち，7 号機が M-MSV で実戦未投入とされている点。

ご覧のように，この場合もやはりネックとなる部分が存在しているのである。（本ページ前出の脚注にも関連する部分が多い。）

これまで RX-78 系列の型式番号を考察する場合，多くが「機番」あるいは「仕様」のどちらかに拘ってしまい，それが故にどうしても「捨てざるを獲ない」部分が生じていた。また，一つの考え方がコンセンサスを得るとどうしても「一般的に○○だから，機番（或いは仕様）説はありえない」という固定概念にとらわれがちな傾向を見せることが多かったように思われる。
これは，コンセンサスを得た説に対する対論が受け入れられにくいことを如実に表していると思われるが，本論では，あえてこういった一般的な考え方とは異なった方向でアプローチをしていきたいと考えている。

すなわち，現在の主流の考え方である「枝番＝仕様説」に対して，あえて「枝番＝機番説」を持ち込んでみようと考えているのである。つまりは，「実は，RX-78-1 〜 8 というナンバーはは型式番号だけではなく（機体）登録番号としても存在しており，これらが両立している」という形で，両論を成立させようという暴論なのである。

一般的に機体の機番（或いはロットナンバー）というものは，型式番号とは異なる物であるが，これをあえて「同じ番号であった」と解釈するのである。
すなわち, 結論から述べてしまうと,「当初, RX-78 型として建造された機体は，RX-78-1 〜 8 という機番で登録されて，各々の仕様が固まってくるに連れて，RX-78-1 〜 7 という型式番号が登録された」……という考え方である。（すなわち型式番号と，登録番号のダブルナンバーと考えるというのはどうだ

[#18]
この点については，M-MSV の当時から疑問点として残っていた。実際，M-MSV の解説は，RX-78-4 〜 7 は，いずれも再設計機のように受け取れ，機番＝型式番号としか受け取れない形の解説であったため，この混乱は起こったと思えるのだ。
素の RX-78 に近い形状の機体を枝番処理するという理屈ならば，RX-78XX や RX-78NT1 も枝番処理されていてもおかしくないレベルである。

ろか，という提示である。）[#19]

個人的に，「RX-78-1 ～ RX-78-3 というのは仕様である」という解説に異論を挟むつもりはない。むしろ，その方が説明しやすいのは事実である。しかし，RX-78-4 ～ RX-78-8 は機番説との折衷案でなければ説明しづらいと感じているのである。これを単に仕様と一刀両断してしまうと，様々な形で問題点が生じてしまうのは先述のとおりである。
いずれにせよ，暴論には変わりないが，楽しんで頂ければ幸いである。

なお，以下，本論で仕様を表すときには，78-1 仕様/78-2 仕様（或いは，RX-78-1 仕様，RX-78-2 仕様）という形で，機番を表す場合は，78-1 番機/78-2 番機（RX-78-1 番機，RX-78-2 番機又は，ガンダム 1 号機，ガンダム 2 号機）というような記述法で記述している。
また，各種資料に関しては，基本的に該当部分の引用にのみ止めているが，プロトタイプガンダムのメカニカルファイルに関しては，その入手が現在では極めて困難であることから，巻末に全文引用の形で掲載させていただいた。必要に応じて，チェックをしていただきたい。

蛇足ながら，以下の本文は，論文調でまとめてあるため，出典など視聴者視点のものについては，省略している。そのため，文章の出典を歴史資料として，また，イラスト類を写真とした形で記述を進めている。
よって，それら細かい記述については，その都度脚注でフォローすることとする。

■1.初期に建造された RX-78 型

いわゆる RX-78 系列のうち，最も初期に建造された機体は，8 機であるという解釈については，様々な資料[#20]から異論を挟む余地はないだろう。これら 8 機は，ジャブローでロールアウトした機体であり，1 ～ 3 号機は実戦対応のための改修が行われた後ルナツーへと移送され，4 ～ 8 号機は冷却装置などを持たない状態で量産型 MS（後の RGM-79）の母体となったとされている。
ただし，ここでいう 8 機とは，後に存在が確認された RX-79 型[#21]や各種 RX-78 型から鑑みるに，「MS として（ジャブローで完成した）最初の RX-78 型」と解釈するのが妥当であろう。実際，原文を見るに「ジャブローで製作された RX-78 の総数は 8 機」であり，実際に MS としてロールアウトしたのが 8 機であり，建造されていたパーツ群などは考慮されていないことが判るだろう。

RX-79 型については，V 作戦を経由しない MS 開発計画によってプランニングされた MS といわれているが，一方では，RX-78 の開発において要求水準を満たしきれなかったパーツ群を流用して開発された機体群であるという説も存在する。現状では，いずれを否定するにも論説の強度としては不十分であるため，逆に考えて，いずれの説も満たす方向で考慮していった方がいいだろう。（この内容については，後述する RX-79 型の項で解説を行う。）
実際の RX-79 型の開発経緯が，新造機体であるにせよ，RX-78 の余剰パーツ流用機であるにせよ，RX-79 型のうちで陸戦型に分類される RX-79[G]が少なくとも 20 機以上（一説には 24 機）は製造されていることから，同じ「試作機」として開発が進められた RX-78 型がわずか 8 機だけではなく，相当数のパーツ群が製造されたという形で解釈することはなんら問題ないだろう。

さて，RX-78 の（パーツを含めた）総生産数はかなりの数である，という前提を行った上で，ここから初期型 RX-78 について，様々な面から考えていってみよう。

初期型 RX-78 が 8 機ロールアウトしたことは，先に触れている。このなかで，初期の RX-78 型というと，一般的にはアムロ・レイ少尉の運用した RX-78-2 や RX-78-1 プロトタイプガンダム，

[#19]
この考え方自体は，以前からぼんやりとあった（RX-78 **が仕様説だけならバランスが悪いと考えていた）のだが，**G **ガンダム関連の資料をまとめていた際に，考え方の方向性がでてきたものである。**
G **ガンダムにおいては，同じ機体に異なった「登録番号」が，当てられていることがある。また，同様に国における型式とガンダムファイトの登録番号が異なることも当たり前なのである。**
仮にドモン・カッシュがライジングガンダムでガンダムファイトに参加した場合，この機体が GF13-017NJ **と登録されたことは間違いないとおもわれる。この考え方に至ったとき** RX-78 **に応用が可能と考えたのである。**

[#20]
MSV **プロトタイプガンダム解説書他，多数の資料で確認できる。**

[#21]
ここでいう RX-79 **型とは，**RGM-79 **のプロトタイプとしての** RX-79 **型だけではなく，一般的に陸戦型ガンダムと呼ばれる機体などのことである。**

RX-78-3 G-3 ガンダムなどがまず思い浮かぶであろう。

実際，この 3 種の機体は，極めて初期の資料から確認できるものであり，少なくとも 3 機の RX-78 の所在については，はっきりしているといえるのである。
残りの 4 ～ 8 号機に関しては，初期に確認された資料では，いずれも存在は明らかであったが，その運用に関しては，不明な部分が多かった。
しかし，後に確認された資料では，初期に発見されていた資料の記述を裏付けるような「改修後」の 78-4 ～ 7 号機の姿が確認され，その運用についても記述が得られているのである。（ただし，8 号機に関しては，未だ情報が確定していない。）
これらの「セカンドロット」機については，別項で語ることとして，ここでは 1 ～ 3 号機と「改修前」の 4 ～ 8 号機を中心に述べていこう。

1 ～ 3 号機については，初期の資料からその存在と，いかなる運用が行われたかはっきりしている部分が多い。ところが，この 1 ～ 3 号機について，いかなる型式であったか，という点については，実ははっきりしていない部分も多いのである。
先に述べた 3 機は，それぞれ型式がバラバラであるが，この型式についても実は，複数の資料から導き出された内容に過ぎず，一つの資料でこのデータをきちんとした形で残しているものは，実際には皆無に近い状態なのである。[#22]

また，型式が触れられていないものの，明らかな初期段階の RX-78 と思われる写真や記述が見られる資料がわずかながら存在している。一般的には「トンデモ」として切り捨てられそうな資料以外にもそういった写真を見ることが出来，また，こういった資料であっても場合によっては，非常に重要な役割を果たすことがある。そのため，取り上げられる物については，それぞれまとめていくスタンスを取っている。

それでは，まずはそれら初期型と思われる記述や写真についてまとめていってみよう。

まず，最も有名である RX-78-1 プロトタイプガンダムに関する資料[#23]には，数点の写真（1 号機と 2 号機ののいわゆる RX-78-1 仕様のもの）と連邦軍の MS 関連（RX-75 系列のもの）の記述，そして RX-78 型の記述が記載されている。

この資料には，以下の記述を見ることが出来る。

（引用 1）

> ジャブローで製作された RX-78 の総数は 8 機で，内 1 ～ 3 号機はサイド 7 へ，残り 5 機は，その機能と形状から初期試作型として，中間武装型，後期試作型(3 号機仕様)と区別される。これらはほぼ素体のままで種々の冷却システムを持たぬまま RGM-79 の母体となった。改装中であった 4，5 号機は星 1 号作戦においてホワイトベース級 2 番艦サラブレッドに搭載されたとあるが，正式に確認できる資料は現存していない。また 6 ～ 8 号機の参戦記録等も残されていない様である。

この資料は，一年戦争の勃発間もない時期を UC0077/7 月としたり，RX-75 のコアブロック搭載型の原型機が，同じく UC0077 年にロールアウトしているなどの一部現在確認されている資料類とは整合性に欠く部分も存在しているのだが，全体的に見て，これらの部分を考慮して時系列を修正していけば，十分信頼に値する資料であることは間違いないだろう。
引用したこの記述は，資料の末尾部分の一文であるが，一見しただけで非常に重要な記述であることが判るだろう。

そこで，まずこの記述を簡単に箇条書きにしてみたのが以下である。

1．ジャブローで製作された RX-78 は，8 機
2．1 ～ 3 号機はサイド 7 へ，残りはジャブロー
3．5 機は，RGM-79 の母体となった
4．5 機は，3 種に区別できる
5．4，5 号機はサラブレッドに搭載された
6．6 ～ 8 号機の参戦記録は残っていない

1，2，3 については，従前からある RX-78 関連の説ではいずれも取り入れられている内容であるため，詳細は省略する。
ここで問題となるのは，4，5，6 の 3 つである。

まず，4 の 4 および 5 号機についてであるが，こ

[#22]
実のところ，GUNDAM OFFICIALS **が，**MSV **のインストラクションなどをベースに一つの説として形にしてはいるのだが，実際には不完全なものとなっているのである。**OFFICIALS **では，既存のバンダイ製プラモデルや講談社，角川書店などの書籍類の情報をまとめた物ではあるが，文意の解釈は，より当たり障りの無い形になっており，好意的解釈の部分も多い。**
無論，それは多くの資料を編纂する上では非常に重要なことであり，この編集方法が正しいと言えるのだが，重箱の隅をつつき始めると，やはり，「ここはこう解釈したほうがいいのでは」という部分がどうしてもでてくるのである。

[#23]
1/144 **プロトタイプガンダムのインストラクションのことである。**

れに関しては，後に発見された資料[#24]で，実際に運用されていた事実が確認されているため，特に問題は無いだろう。また，６についても，6 号機は実戦投入されており，また，7 号機についてもプランニングは確認されている。これらについては，他の資料の内容を含め，RX-78 後期型の項で説明するので，ここでは省略することとする。

さて，問題は，「４」の 4 ～ 8 号機は，3 種に区分できるという記述である。実は，箇条書き部分では，「４」のようにまとめたのだが，引用文を見てもらうと判るように，実はこの部分，文章として非常に曖昧な状態であり，実際にはこの 3 種というのは，4 ～ 8 号機のことではないと考えられるのである。[#25]というのも，「初期試作型」，「中間武装型」，「後期試作型（3 号機仕様）」の部分を 4 ～ 8 号機の記述と考えると，その後に続く文章，「*これらはほぼ素体のままで（中略）RGM-79 の母体となった*」と，整合性がとれないのである。[#26]

つまり，「*その機能と（中略）と区別される*」という部分では，「3 号機仕様」という「仕様」が登場していることから，この部分は実際には，1 ～ 3 号機に関するものであり，その後の「ほぼ素体のまま」というのは，4 ～ 8 号機を指すことは，文意からして間違いないと考えられるのである。（ところが，これを明確に示した資料が実は現時点では存在していないのである。ここが，RX-78 の型式を考える上でのネックではあるのだが……）

また，この文章からさらに問題点を指摘することができるのである。

繰り返しになるのだが，引用文をもう一度見てもらいたい。文章は「*残り 5 機はその機能と形状から初期試作型として，中間武装型，後期試作型（3 号機仕様）と区別される*」とまとめられているのである。

すなわち，「初期試作型に中間武装型と後期試作型が含まれる」のか，「初期試作型，中間武装型，後期試作型の 3 種が存在する」のか，が文意から取りにくいのである。

また，先ほどは否定したが，この文章が，ジャブローに残された 5 機の RX-78 のことを示している場合，「5 機の RX-78 は，初期試作型であり，中間武装型と後期試作型とは区別される」という解釈も可能となってしまうのである。つまりは，3 通りの解釈が出来てしまうのが，この文章の最大の問題点でなのではないだろうか。

ここでいずれの考え方を取るか，という点に焦点が移るのだが，ここで提示したい写真が存在する。手元にその資料がある人は確認をしていただきたい。

別の資料に極めて初期の RX モビルスーツを撮影した写真が存在するのである。[#27]この写真に写っている RX-78 は，我々が知るどの型式の RX-78 とも異なっているのである。

特徴的な部分として，頭部 V 字アンテナが無く，また，腰部ヘリウムコアも存在していないことがあげられる。引用文 1 をみると，4 ～ 8 号機は，「*ほぼ素体のままで種々の冷却システムを持たぬまま RGM-79 の母体となった*」とされている。

その点から考慮すると，ヘリウムコアなど様々な装備が施されていない，この写真の機体こそが，いわゆる「素体」であり，RX-78 としての型式が与えられた直後（あるいは，その前段階の X-78 と呼ばれる機体である可能性も否定はできないが，X-78 についてはさらに詳細なデータがないため，現時点では考えないこととする）と考えられるのである。

すなわち，ここから考えるに，やはり「初期試作型」，「中間武装型」，「後期試作型」という 3 つの区分は，1 ～ 3 号機において別に存在すると考えるのが妥当ではないだろうか？[#28]

[#24]
「宇宙，閃光の果てに…」のこと。

[#25]
この解釈については，筆者個人の考え方のみならず，ルロイさんの考察が非常に大きく影響しています。特に，文意の取り方については，ルロイさんのインストラクションの解釈を参考にさせていただいています。

[#26]
ただし，強引な解釈は実は可能である。
4，5 号機を高機動戦闘型，6 号機を火力支援型，7，8 を未完成プランと区別する方法である。

[#27]
この写真とは，ガンダムセンチュリーに掲載された初期型 RX モビルスーツのイラストのことである。
このイラストの RX-78 に関しては，初期状態であるという点以外，情報はなく，型式も明らかにされていない。

[#28]
ちなみに後にガンダムヒストリカで，完成直後の RX-78 のイラストが書き下ろされたが，このイラストは完成直後，あるいは 78-1 仕様への改修直後の状態と考えている。正面に描かれている機体が 3 機であることから，画で後ろに描かれている機体は，素体のままと解釈している。

さて，ここで改めて 1 ～ 3 号機の仕様について記述した部分を前出の資料から引用してみよう。

（引用 2）

> 原型 1 号機には徹底した軽量化が図られ，続く 2，3 号機と共にサイド 7 へ運ばれた。宇宙空間での戦闘に絶えられるべく，腰には冷却ユニット等が設けられ，大気圏突入能力もあわせて与えられている。(中略) 1, 2 号機には同仕様の改修が施され，（ジャブローで工作終了）テストは順調に行われた。当初はビームライフルの腕への一体化が考慮されストラップ付きのハンドショットガンスタイルのビームライフルが実験に使用され，右腰にはそのためのホルスターが設けられていた。遅れてサイド 7 に運ばれた 3 号機からは簡略化（と言うより無駄の整理）がさらに計られ，ビームライフルの外部形式も 3 号機仕様にあらためられたので 1，2 号機は間もなく 3 号機仕様へ若干の改造を受けている。（後略）

この文章を読んだ限りでいえば，ポイントは 1，2 号機と 3 号機では，改修されたタイミングが異なっている，という点であろう。また，ビームライフルの記述に関しても面白い特徴がみられる。

さらにこの部分に続く部分に以下の記述が存在する。以下の記述と前出の引用とをまとめて考慮する必要があるだろう。

（引用 3）

> サイド 7 で実用試験を行っていた 1 ～ 3 号機の内 2 号機はペガサスへ搭載され，アムロ少尉の活躍により戦後も数多くの功績が認められている。サイド 7 で奇襲によって RX モビルスーツはすべてが失われたとされているが，その後の調査で 3 号機がほぼ無傷で発見され実戦参加していることが確認されている。星一号作戦の際マグネットコーティングを受けたとあり，機体をグレーとライトグレーで塗り分けた写真も発見されている。しかしながら機体は 2 号機同様発見されず，アムロ少尉が乗り換えたとする説も強い。

この記述から，従前から言われているように RX-78 の 2 号機がアムロ・レイ少尉（当時）の搭乗機であることは間違いない。また，「2 号機（およびペガサス[#29]に搭載された RX-77，RX-75）以外の RX タイプモビルスーツは，全てサイド 7 で失われたとされていたが，RX-78 の 3 号機がほぼ無傷で発見されている」点も記述されている。この 3 号機こそが，今日で言われる「G-3 ガンダム」であることは，機体色などからも間違いないであろう。

しかし，この 3 号機の記述と，前出の引用 2 の記述とを組み合わせて考えると，少々腑に落ちない部分がでてくるのである。

すなわち「3 号機仕様」という言葉である。

現在，一部論説ではこの 3 号機仕様を「RX-78-3」仕様と解釈する部分がある。しかしながら，引用 2 をもう一度見直して欲しい。問題となるのは，「*ビームライフルの外部形式も 3 号機仕様にあらためられたので 1，2 号機は間もなく 3 号機仕様へ若干の改造を受けている*」という記述である。

現在の定説として，1 号機は RX-78-2 仕様に改修後，ジオン軍の強襲によってサイド 7 で失われており，RX-78-3 仕様への改修は行われていないのである。逆に言えば，この時点で 3 号機仕様となっていると解釈すると，RX-78-3 仕様は，「RX-78-2 仕様にマグネットコーティングを施した物」では無くなってしまうのだ。

また，引用文を読んでもらうとわかるのだが 3 号機仕様への改修のポイントとなっているのが，ビームライフルの形式なのである。一般的に RX-78-3（G-3 ガンダム）の運用したビームライフルの形状は，RX-78-2 の物と変わらない。（無論，内部的に変更があった可能性は否定できないが，引用文で示されているような「形」の変化ではないことは明らかである。）すなわち，引用文中の 3 号機仕様と RX-78-3 仕様（マグネットコーティング）とは無縁なのである。[#30]

このことから，ここで言われる「3 号機仕様（前出の引用 1 と組み合わせると後期試作型）とは，RX-78-3 仕様ではない」ということが確定する。

では，この 3 号機仕様とは，どういった仕様を指すのか。そこで注目してもらいたいのが，やはり，ビームライフルに関する記述なのである。

繰り返しになるが，3 号機仕様に関しては，「*遅れてサイド 7 に運ばれた 3 号機からは簡略化（と言うより無駄の整理）がさらに計られ，ビームライフルの外部形式も 3 号機仕様にあらためられた*」という記述が見られ，その前の「*当初は（中略）ホルスターが設けられていた*」という，いわゆる「RX-78-1 プロトタイプガンダム」の外形と一致する記述から，「3 号機仕様こそが RX-78-2 仕様」であると考えられるのである。

では，中間武装型とは…と考えると，本文中の記述から，これこそが RX-78-1 仕様であると考える

[#29]
現在では，ホワイトベースであるというのが定説となっている。
おそらくこれは就航 1 番艦であるホワイトベースとクラスネームであるところのペガサスからきた混乱であろう。

[#30]
実は，多くの考察系サイトは，この部分を見落としている。

ことが出来るのである。そして，初期試作機という区分こそが，「*原型 1 号機には徹底した軽量化が図られ*」という記述から，この「軽量化前」の仕様であると考えられるのである。（つまりは，意味的には「素体」と等しいと言えるだろう。）

この様に考えると，その前後の 1，2 号機の記述と 3 号機の記述が整合性がとれ，「3 号機仕様＝RX-78-3」仕様と考えた場合の本文中の記述の矛盾点が解消されるのである。

この論説をもう少し進めよう。

3 号機仕様という言葉と同様に，3 号機にまつわる仕様を表す言葉に，RX-78-3 仕様以外にもう一つの記述法を現在見ることが出来る。「G-3 仕様」というものがそれである。この G-3 仕様は，今日では「RX-78-3 仕様」と同義として解釈されている。つまりは，「G-3」を RX-78-3 と同義に扱っているという解釈でもあるといえるのだ。ただし，この考え方には注意をすべき点も存在する。

この G-3 という言葉は，いわゆる「G ナンバー」であり，RX-78 に与えられた機体ナンバーのことである。
この「G-3」を単に仕様を表す言葉として解釈すると様々な面で既存の資料との不整合をもたらすのである。

ここで別の資料 2[#31]からの引用を次に記載する。

（引用 4）

> RX-78 の名を冠して製作された 8 機のガンダムの内，1 ～ 3 号機は改修工作と実用試験のためルナツーへ運ばれた。これらは呼称として G-1 ～ G-3 ガンダムという名が与えられており，G-2 はホワイトベースへ搬入，ニュータイプパイロット アムロ・レイ少尉によって数々の戦績を残している。G-1 は奇襲攻撃で失われ，G-3 は後にフィールドモーターにマグネットコーティングを施した形で実戦参加している。
> 残る 5 機はジャブロー工廠から宇宙へは運ばれず，RGM-79 生産のための母体となったが，後に G ナンバーの仕様に武装されている。4・5 号機はサラブレッドに搭載，残る 6 ～ 8 号機も参戦したらしい記録が確認されているが，実際にどの程度まで仕上げられて実戦に投入されたかは実機が回収されていないため，不明である。これらの試作機は実働途上だった FSWS に参入される予定もあった。

この資料 2 は，先の引用 1 ～ 3 とは別の資料であるが，記述内容に関しては，ほとんど同じものである。
異なる部分は，1「1 ～ 3 号機に G-1 ～ G3 という呼称が与えられた」，2「6 ～ 8 号機も参戦したらしい」，3「これらの試作機は FSWS に参入される予定もあった」といった部分である。

つまり，ここで記述されているように，すくなくとも G-1 ～ G3 という呼称は，機体に与えられた「機体コード」であったということなのである。このことから，単純に「G-3 仕様」という言葉を RX-78-3 仕様と片付けるわけにはいかないことが判るだろう。[#32]（ただし，「G-3 仕様」が RX-78-3 仕様では無い，と言っているわけではないので，念のため。）

現在，G-3（この場合は，機体としての G-3 ガンダム）については様々な記述を見ることができるが，いずれにせよアムロ少尉の搭乗機を G-3 と断定するのは無理だということになる。また，3 号機に乗り換えたという説も存在するが，引用 3 の 3 号機のカラーリングの記述から考えると，実際にアムロ少尉の搭乗した 2 号機は，カラーリング変更を行われずにア・バオア・クー攻防戦において失われていることから，3 号機に乗り換えなかったことは判ってくる。逆に言えば，3 号機仕様の機体に乗り換えた（実際には，機体そのものがバージョンアップした，ということなのだが），という事実が一人歩きした可能性は否定できない。[#33]
（なお，後年発見された資料[#34]によれば，ペガサス級 5 番艦ブランリヴァルにて 3 号機と思われる機体が運用されている。）

すなわち，これらの記述からいえば，「アムロ・レイは，RX-78-2 仕様から，RX-78-3 仕様へと改修されたが，機体は最後まで 2 号機を運用した」と考

[#31]
限定配布されたプロトタイプガンダムのメカニカルファイルからの引用である。

[#32]
さらに補足すると，1/144 **プロトタイプガンダムのインストラクションの塗装ガイドでは，**1 **号機の胸部に** G-01**，**2 **号機の胸部に** G-02 **が見える。すなわち，**RX-78-1 **でありながら，**G-02 **が与えられているのである。**
このことからも，G **ナンバーを仕様と簡単に言うわけにはいかないことが判るだろう。**

[#33]
ここでは，小説版の記述を異説として考えた形で本文を記述している。小説版では明らかに乗り換えているわけであるが，その内容もあり，パラレルである。解釈としては，「異説」とするしかないだろう。

[#34]
「ガンダム・ザ・ライド」，および「GUNDAM EVOLVE**」のこと。**

えるしかないのである。

さらにこの引用 4 では，4 ～ 8 号機が，「*後に G ナンバーの仕様に武装されている*」という記述をみることができる。
この記述をどのように解釈するかが，一つの問題ではないだろうか。すなわち，「G-4，G-5 … G-8 という仕様が与えられた」と解釈するか，「G-1 ～ G-3 が改装された仕様に残り 5 機も改装された」と解釈するかの問題なのである。

ここでまた異なった資料 3[#35]よりの引用文を掲載する。

（引用５）

> 連邦軍の科学技術の粋を集めた RX モビルスーツの中でミノフスキー粒子下での対モビルスーツ戦を視野に入れ，白兵戦用機として開発されたのが通称「ガンダム」である。中でも試作機のまま実戦に投入されたタイプ 2 のアムロ少尉機に対して最初期に完成したいくつかのタイプ 1 モデルを総称して「プロトタイプガンダム」と呼んだ。
> （中略）
> このタイプ 1 は，ジャブローで 8 機ほど生産されており，後にタイプ 2 へ全機とも改修されている。

この資料 3 は，先に示した資料 1，2 よりも新しい資料である。資料 1 よりもおよそ 20 年後に発見された資料[#36]であり，様々な新事実も確認できる資料である。
ここで新たな仕様と思われる記述が登場している。
タイプ 1，タイプ 2 がそれで，原文からの解釈に依れば，タイプ 1 がプロトタイプ（＝ RX-78-1 ＝中間武装型）であり，タイプ 2 がアムロ・レイ機の仕様（＝ RX-78-2 ＝後期試作型）ということになる。
そして，「*タイプ 1 は，ジャブローで 8 機ほど生産されており，後にタイプ 2 へと全機とも改修されている*」という記述が存在することから，1 ～ 8 号機全てが RX-78-1 及び RX-78-2 仕様の状態が存在したということになるのである。

また，後の改修後の機体のうち，4 号機に G-04，5 号機に G-05 のコードが与えられているのが確認できる。4 号機および 5 号機が運用された状況を記した資料は，実は複数の記載が存在しており，4 号機が失われた記述，5 号機が失われた記述，両機とも無事であったという記述の 3 種類[#37]が確認できる。
しかし，いずれにせよ 4/5 号機の運用がなされていたという事実は変わらないといえる。

実は，ここで重要なポイントとなるのは，4/5 号機を運用していたサラブレッドの機体コールのコードなのである。
サラブレッドでは，この G-04，G-05 は，運用時のコールサインとして用いられており，搭載のガンキャノンが C ナンバーでコールされていた。G ナンバーが機体仕様を表すコードだと考えると，複数機存在する可能性のある G ナンバーを機体コールに使用するとは考えにくいのである。また，同様に仕様ナンバーであるとした場合，機体コールに G ナンバーを用いるメリットはなく，かといってサラブレッドの全ての機体に与えられた「連番」であるということでもないのだ。
そして，引用 4 の 1 ～ 3 号機の記述から考えるに，同様に機体に与えられた機体コードだと考えられるである。（要するに，G-04，G-05 とは事実上の機体名であると考えられるのである。）

この考え方は，実のところ第 13 独立戦隊ホワイトベースで用いられた機体コードの運用と同じものなのである。

ホワイトベースでは，RX-78-2 を単に「ガンダム」と呼称し，RX-77-2 を「ガンキャノン」，RX-75 を「ガンタンク」とコールしていた。ところが，ジャブローで RX-75 を降ろし，RX-77-2 の 2 機運用体制となってからは，RX-77-2 を「C108，C109」でコールしているのである。（これは，FF-X7[Bst] の「005」，「006」というコールサインも同様である。）
つまり「ガンダム」は，元々の機体数が少なく，運用部隊が限られていたため，どの部隊においても単機あるいは極めて少数が配備されていた，と考えられるのである。（これは他の RX 型についても同様だと考えられる。）
こういった場合，基本的にコールサインは「ガンダム」あるいはそれに準ずる機体コードであったと考えるのが妥当であろう。そして，複数の「ガンダ

[#35]
MIA **プロトタイプガンダムのデータシートより引用。**

[#36]
プロトタイプガンダムのプラモデルの発売からおよそ 20 **年後に** MIA **のプロトタイプガンダムは発売されている。**

[#37]
4 **号機が失われたのが「宇宙，閃光の果てに…」であり，**5 **号機が失われたのが「シークレットフォーミュラ（**M-MSV **の小説）」である。両機とも帰還したのが，「宇宙，閃光の果てに…** if**」である。**
実は，「宇宙，閃光の果てに…」，「同 if**」はグラナダ戦線が描かれており，「シークレットフォーミュラ」ではア・バオア・クー戦線が描かれている。そのため，解釈によっては，**4**，**5 **号機が複数存在するという解釈も可能ではあるのだが，パイロットが同名であるということから，今回の考察では，どちらかといえば，現在主流である「宇宙，閃光の果てに…」を中心に考えている。**

ム」を運用する際に初めて機体コールのためのコードが必要となってくるのである[#38]。
その点で言えば, サラブレッドでは, ガンダムが 2 機体制であることから，機番をそのままコールコードに利用したのであろう。[#39]（でなければ，部隊ごとにコールサインは変わっていてもおかしくないのだ。）

ここから先は筆者の想定も幾分含まれるのだが，確認された 4/5 号機に G-04，G-05 という呼称が与えられており，さらに 1 〜 3 号機には，G-1 〜 G3 という呼称（実は, マーキング類を合わせると, G-01 〜 G-03 という表記も見られる）が与えられていることから，おそらく初期に建造された 8 機には，それぞれ G-1 〜 G-8（G-01 〜 G-08 でも可）という機体番号（機体名）が与えられていたということであろう。つまりは，G-1 〜 G8=78-1 号機〜 78-8 号機，ということである。

ここで筆者から一つの疑問を提示したいのだが，G1 〜 G8 という G ナンバーの割り振りは，単に現場で行われた物だろうか？

筆者は，おそらく異なると思うのである。
型式番号（後述するが，この時点では，おそらく単に「RX-78」）が同じ試作の機体で，この様な呼称がわざわざ付けられるというのは，やはり機体ごとに何らかの区別を行う必要があったからではないかと思うのである。

RX-78 は，連邦軍の主力 MS の開発のための試作機であり，完成した 8 機がそれぞれ別のテスト目的を持っていたとしてもおかしくないのである。
実際，1 〜 3 号機と 4 〜 8 号機では，その目的が異なっていたことは，引用 1 などからあきらかである。つまり，1 〜 3 号機は，実戦型 MS の為の運用データ収集，4 〜 8 号機は，量産型 MS のための機体構造等の検証機と考えると無難だろう。

すなわち，G ナンバーとは，各機ごとのテスト項目やその運用などに対する識別のために与えられた機体識別コードである可能性が高いということなのである。
さらに，4 〜 8 号機は，後に確認できるその機体が，1 〜 3 号機の機体構造と大きく変わっている点は，RGM-79 の開発計画が順調に進んだ時点で，再設計が行われたと考えるのが現状我々が得ている資料から推察できる最も無難な解だと考えられるのである。
このように考えると, G ナンバーは, 初期の RX-78 に対して各種のテスト，あるいは，各種の仕様のデータ収集のために与えられた「機体名そのもの」と考えた方が都合がいいのである。（実際の機体名は，ガンダム 1 号機〜ガンダム 8 号機といったものであろうが，その通称が G1 〜 G8 であったと考えた方がいいだろう。）

さて，ここで先に挙げた「G-3 仕様」について，ちょっと考えてみたい。

これまで説明してきた内容の場合，G-3，すなわちガンダム 3 号機は，ロールアウト後，先に触れた中間武装型を経由した後，後期試作型仕様（3 号機仕様）として改修されている。そして，ここでいう後期試作型仕様は，形式で言うところの RX-78-2 であることも触れた。
しかし, 一般的な解釈によるところの「G-3 仕様」とは，形式で言うところの「RX-78-3」なのである。無論，「G-3 仕様」が形式で言うところの「RX-78-2 仕様」であったと考えてしまってもいいのだが，G4 計画における開発機や 4 号機以降のセカンドロットがマグネットコーティングを行っていた可能性が高いことから考えても, やはり一般的な解釈同様「G-3 仕様＝ RX-78-3 仕様」と考えるのが妥当であろう。つまり，「3 号機」を表す仕様というものが，複数存在したということも言えてしまうのである。

これは，こういった仕様論で考えるとスマートではないのであるが，この問題を解決する方法が無いわけではない。つまり，「3 号機仕様」という仕様は，当初用意された仕様であり，「G-3 仕様」という仕様は後に追加された仕様であると考えるのである。

[#38]
とはいえ，実際に部隊運用を行っている場合，単機であろうとも通信コードとして機体コードを用いることは半ば当たり前である。その点から考えると，ホワイトベースの「ガンダム」は，G-2（G-02）**といったコードで呼称されていた事は十分考えられる。**
なお，ガンダムのマーキングに WB02 **や** 102 **などが存在するが，これをそのまま機体コードとすることは筆者としては反対である。**

[#39]
G **ナンバーを仕様とする説を採る場合に，ガンキャノンの** C **ナンバーや** 78-2 **号機のマーキング（**WB02，102**）等を例示する場合があるが，筆者はこれだけでは弱いと思っている。例えば，戦闘機などでも複数の機番を示すマーキングが存在するが，実際のコールサインはそれら機番のマーキングではなく，機体そのものに与えられたコードで行われるのである。一般機よりもむしろ実際の試作機でのコールサインは，機体そのものに与えられたペットネームを用いることが多いのである。**
一方，ガンキャノンのコードは，試作機ながら比較的多数生産されたガンキャノンの識別のために与えられたコードであり，これが機体ナンバーを示すか，所属コードを示すかという資料は実は「存在していない」。つまり，この C **ナンバーを部隊所属ナンバーと単に断定することもできないのである。（**RX-77 **全体の生産番号の可能性もあるのだ。）**

少々わかりにくい言い回しなので，もう少しこの考え方を進めてみよう。

初期の RX-78 の仕様に関しては，型式番号による仕様とそれ以外の言葉によって説明された仕様とが混在している。前者が，RX-78-1 ～ 3 であり，後者が初期試作型，中間武装型，後期試作型といったものである。

これらをこれまでの論説に合わせて，それぞれ対応させていくと次表の様な形になる。

（表１：型式番号と仕様名/対応表）

型式番号	対応する仕様
RX-78（無し）	初期試作型
RX-78-1	中間武装型
RX-78-2	後期試作型 3 号機仕様
RX-78-3	G-3 仕様 / MC 仕様
RX-78-4	初期型には該当無し
RX-78-5	〃
RX-78-6	〃
RX-78-7	〃
RX-78-8	〃

少なくとも，RX-78-4 ～ 8 に対する仕様名については, 初期には存在していないことは明らかである。逆に言えば RX-78-4 ～ 8 仕様という言葉も，後のセカンドロットで登場したことになる。

初期試作型，中間武装型，後期試作型という仕様名は，初期に発見された資料にその記載が見えることから，当初からこのように呼ばれていたことは間違いないだろう。これは，最初に RX-78-2 仕様に改修された 3 号機の名称をとって，3 号機仕様と呼称していることからも明らかである。

一方，RX-78-3 仕様以降の仕様は，いずれも後に開発された仕様であり，当初から存在した物ではないのである。この中で RX-78-4 仕様以降は，いわゆるセカンドロットとしてまとめられているのだが，RX-78-3 仕様については，その成立の仕方からして非常にイレギュラーであるとも言えるのである。

このように，対応させて考えると RX-78-3 仕様では，G ナンバーを仕様として用いているわけではなく，単に，「G-3 が最初に RX-78-3 仕様に改修された」ことによる仕様名であったと解釈することが妥当ではないだろうか。[#40]この結果，「3 号機仕様」同様に 3 号機を表す G-3 という名称が仕様として用いられることになったということなのであろう。

つまり，これらの経緯から考えて，やはり G ナンバーを仕様を表すナンバーとして考えるのは難しいと結論づけざるを得ない。

なお, ここまでまとめたことで, とりあえず以降, G-1 ～ G-8（あるいは, G-01 ～ G-08）と表記した場合, 各々がガンダム 1 ～8 号機に該当するという解釈で展開することとする。

さてここで少々考えていただきたいことがある。初期にロールアウトした 8 機の RX-78 に対して, G1 ～ G8 という機体コードが与えられ，様々な試験などが想定されていたことは先に述べた。

この試験項目であるが，1 ～ 3 号機は，実戦運用のための機体運用のためのデータ収集が主な物であり，実際に機体運用に合わせた改修がおこなわれていることは，前出の各種引用からもわかるだろう。つまり，枝番無しの初期試作型から，武装運用のための中間武装型，そして，実戦対応型の後期試作型（3 号機仕様）と実戦に投入するための運用パターンを模索しながら，改修が繰り返されているのである。

一方，4 ～ 8 号機のテスト項目は，おそらく「*量産型 MS の母体となった*」という記述から考えるに，実際には，設計が流用されただけであり，機体そのものは特に試験されたのではないと考えられる。というのは, RGM-79 の母体として用いられたのは「素体状態」の時であり，この時点では，事実上「MS としての運用は不可能な状態」であったと考えられる。しかし，後に 78-1 仕様，78-2 仕様へと改修を受けている点から 1 ～ 3 号機のデータに合わせて，ジャブローでの改修も順次行われていたことが判るのである。これは何を意味しているのだろうか？

筆者が思うに，RGM-79 の開発に目処が付いた時点で，ジャブロー独自の MS 開発計画にシフトしたのではないだろうか？

すなわち，実際に MS として運用可能なレベルである RX-78-2 仕様にまで改修を進め，その後の改修については，ジャブロー独自のものになった，ということなのである。

このように考えると,「*改装中であった 4, 5 号機*」

[#40]
これは筆者は未だ持って，G-1 **仕様，**G-2 **仕様と記述された資料を保有していない（確認していないだけかも知れないが…）ことから，この様に結論づけている。**
仮に，RX-78-2 **を** G-2 **仕様と記述している資料が存在している場合，本論は修正が必要となる。（**RX-78-1 **を** G-1 **仕様と記述しているだけならば，一番最初に** RX-78-1 **に改修されたのは** 1 **号機であるため，まだ対応は可能である。）**

という引用 1 の記述も違和感なく肯定することが出来る。
すなわち，「ジャブロー独自の仕様に改装中であった４，5 号機」と解釈できるのである。（この改修の際に，4 〜 8 号機仕様が設定されていると想定されるが，この件については，次項で触れる。）

再び 1 〜 3 号機に話題を戻す。

1 〜 3 号機は，ジャブローで基本改修（RX-78-1 仕様への改修）が行われた後，ルナツー（或いはサイド 7 という記述も見られる）で，まず 3 号機が RX-78-2 仕様に改修され，つづいて 1，2 号機も改修されている。
おそらく試験項目としては，この時点で実戦投入仕様として固まっていたはずである。[#41]つまり，この時点では，後の RX-78-3 仕様は存在していないのである。

この試験運用の後，ホワイトベースに搭載し，実戦運用試験に用いられる予定であったが，ここでジオン軍のファルメル部隊によって強襲され，78-1 号機は大破，78-3 号機は小破となってしまう。この結果，ホワイトベースは，ルナツーからジャブローへと向かうこととなってしまうのだが，これは RX-78 の運用データ（試験データ）を量産型 MS に反映するためだと言われている。既に量産型 MS の基本設計は，4 〜 8 号機をベースとすることで行われているわけだが，実際の運用データについては，「MS としての運用が不可能であった」4 〜 8 号機では行うことは難しく，実機による運用データが必要とされていたのである。[#42]
現在では，小破した 3 号機は，2 号機のパーツ取りとして使用され，オデッサ作戦の直前にホワイトベースから降ろされ，ジャブローへと回され，マグネットコーティングの試験機として用いられたと考えられている。これは，ジャブローから出撃したペガサス級ブランリヴァルに搭載されていたことから考えて問題ない解釈だと思われる。
問題は，この回収された時期がいつなのか，ということである。ホワイトベースが補給部隊と接触したのは，UC0079/10/01 の北米，同年 10/09 のアジア地区（これについては，北米説もある），同年 11/02 のオデッサ近郊ということになるが，このうち回収が行われた可能性が最も高いのは，10/09 の補給時である。10/01 は，北米からの脱出行の最中であり，ミデア部隊もかなり無理をした状態での補給であり，ホワイトベースに乗り込んでいた民間人を引き取るのがやっとの状態であったこともあり，まず 3 号機の回収は無理であっただろう。また，11/02 の補給は, その 3 日後に黒い三連星との戦闘が行われ，部隊長であるマチルダ・アジャンが戦死していることからも，この時の回収は無かったと結論づけてもいいだろう。（本来ならば，「オデッサ作戦に前後して」3 号機は回収されているとなっており，この補給時が最も可能性が高いと思われるのだが，状況からすると最も難しい時期だと思われる。）

一部資料には，ホワイトベースのジャブロー寄港時に 3 号機が回収されたという説（下記，引用６）も存在するが, ホワイトベースのジャブロー寄港は，11/27 頃であり，12/02 には宇宙へと打ち上げられていることと，12/08 にはマグネットコーティングを施された機体である RX-78NT-1 が試験を開始していることから考えるに，ジャブロー寄港時に 3 号機を回収したという可能性は極めて低いことになる。
また，2 号機のマグネットコーティングは，UC0079/12/27 に行われていることと，アムロの 2 号機の反応速度の問題点の指摘による改修プランとして開発が進められた 4 号機以降のセカンドロット機が，11 月中に既に稼働している[#43]ことから考えても，3 号機を復元し，テストを行うには，11/02 の回収では期間が短すぎるのではないかという懸念も生じるのだ。
従って，本論では，3 号機のホワイトベースから

[#41]
これは，サイド 7 強襲の際に，ガンダムが実質的に稼働状態であったことからも間違いはないと考えている。
単なる稼働試験ならば，ビームサーベルは起動しない状態になっているだろうし，バルカンの弾は抜いているだろう。ほぼ実戦に近い形でのテストが可能となっていたということなのである。
これは，ガンダム・ジ・オリジンだともっと明確な形で描写されている。

[#42]
ただし，この件に関しては，現在では少々異なった解釈が必要となっていると思われる。というのも，ガンダムがアムロによって運用されたのが，UC0079/09/18 である。実は，その 2 ヶ月前に，すでに RX-79 型のロールアウトがなされているのだ。
つまり，MS 運用のデータだけであるならば，「アムロのガンダム」のデータは必要とされないのである。ここで重要なのは，「アムロのガンダムが史上初の MS 同士の戦いを経験している」という点なのである。

[#43]
ZEONIC FRONT におけるマドロックのこと。実際に，ジャブロー攻防戦で未完成型とはいえ，マドロックが参戦していることを考えると，その設計は少なくとも 10 月下旬頃までには行われていた方が無難である。また，解釈にもよるが，マドロックが 6 号機を改修した機体だとすると，改修中の状態がジャブロー攻防戦と考えられ，よりタイムスケジュール的に 6 号機の完成は早まることとなる。実は，この点にも RX-78-4 以降を単純な仕様説で括るのが難しい点がある。
UC0079/10/09 に G-3 を回収したとして，これを復元，マグネットコーティングを施した機体を RX-78-3 として登録したとして，既に 11 月に稼働しているマドロックなどセカンドロットに RX-78-4 〜 8 の仕様ナンバーがあたえらえるのか，という問題である。この場合，先にナンバーが決まっていた，と考えた方が無難であろう。

の回収を 10/09 と結論づけて論説を進める。

これらの想定から，旧来の資料で見られたルナツーで 3 号機を回収したという記述は，ルナツーで 1 〜 3 号機の運用データを回収した，と考えた方が無難だろう。一部資料には，UC0079/09 にジャブローに補給部隊によって RX-78 のデータが届けられたという記述が見える。しかし，先述したように，ホワイトベースが地球上で初めて補給を受けたのが，10/01 であるため，9 月中にホワイトベースのデータを受け取ることは事実上不可能なのである。そのため，この記述はルナツー経由で持ち込まれた物であると結論づけられる。（この結果，大量生産型としての RGM-79[#44]は，予定より早く，その実戦配備が行われることになったと考えられるが，本論ではこの件については，ここで軽く触れる程度にしておく。）

回収された 78-3 号機は，後にいわゆる「G-3 ガンダム」として修復され，実戦に投入されている。この 3 号機の運用については，近年映像資料[#45]が発見されており，ア・バオア・クー海戦に投入され，一部損壊したらしいことまで確認されている。また，別の映像資料[#46]では，終戦条約締結後（資料では，UC0080/01/09 の日付がみえる）のジオン軍残党との小競り合いにおいて，本機を G パーツと共に運用しているのが確認できる。

このように精査してみると，1 号機は大破により損失，2 号機はア・バオア・クー海戦において損失，3 号機は損壊したものの終戦後一時運用されていた，という形にまとめることが出来る。（詳細は，表 2 を参照。）

なお，4 〜 8 号機は初期型として運用後，それぞれ改修を受けているため，詳細に関しては別項で述べることとする。

（表 2：初期型 RX-78 の仕様変更）

機番	時期	場所	仕様変更
1 号機	建造時 改修 1 改修 2 損失	ジ ジ 7 7	RX-78（初期試作型） RX-78-1（中間武装型） RX-78-2（後期試作型） サイド 7 強襲による
2 号機	建造時 改修 1 改修 2 運用開始 改修 3 損失	ジ ジ 7 7 コ ア	RX-78（初期試作型） RX-78-1（中間武装型） RX-78-2（後期試作型） アムロ・レイ搭乗 RX-78-3（MC 仕様） MSN-02 との相打ち
3 号機	建造時 改修 1 改修 2 小破 回収 改修 3 小破	ジ ジ 7 7 -- ジ ア	RX-78（初期試作型） RX-78-1（中間武装型） RX-78-2（後期試作型） 2 号機の部品取り 地球上で回収 RX-78-3（MC 仕様） ※運用は継続?
4 〜 8 号機	建造時 改修 1 改修 2 改修 3	ジ ジ ジ ジ	RX-78（初期試作型） RX-78-1（中間武装型） RX-78-2（後期試作型） セカンドロットとして改修（別項に譲る）

※場所は，それぞれ「ジ」＝ジャブロー，「7」＝サイド 7,「コ」＝コンペイトウ,「ル」＝ルナツー，「ア」＝ア・バオア・クー，を表す。

ここまで初期型 RX-78 の運用と仕様についてをまとめてきたわけであるが，実はここまでは型式番号＝仕様番号という形での説明を行っている。(表 1 がそのいい例である。)G ナンバーと仕様番号に関連性がない，という点は，従前見られる仕様説とは異なった部分だが，大筋は，型式番号＝仕様説そのものであることが判るだろう。

ところが，次に提示する引用 6 は，この仕様説だけでは説明不可能な形の記述となっているのである。

[#44]
初号機のロールアウトが，UC0079/08 **という記述も見られるが，これは** RGM-79[G]，RGM-79[E]**と考えた方がいいだろう。あるいは，ロールアウトしたものの，事実上の張りぼてであった可能性は否定できない。**

[#45]
GUNDAM THE RIDE **のこと。ブランリヴァル内で確認できる。**

[#46]
GUNDAM EVOLVE../11 **のこと。**
G-3 **タイプの** G **アーマーが運用されていたことが判る。**

（引用６/資料４より）

> （前略）同様に，サイド 7 で開発されていた試験型の同型機にも微妙な変更が施されており，RX-78 ナンバーの MS も 3 機建造されていた。その内，実戦に投入された"ガンダム"が RX-78-2 である。RX-78-1 は敵の攻撃などによって損壊し，RX-78-3 はガンダムの予備，補修パーツとしてストックされた後，ホワイトベースが連邦軍本部のジャブローに寄港した際にテストヘッドとして研究工廠に搬入され，G-3 ガンダムとしてレストアウトされたと言われている。

どうだろうか，この記述内容から言えば，RX-78-1～3 というナンバー（ここでは敢えて型式番号とは言わない）を機番として使用しているとしか説明は不可能なのである。この資料は，前出の 3 号機の回収時期など，解釈に関して問題点が無いとは言えないが，資料そのものは従前から存在している物であり，他の資料等でも用いられている物である。

この引用６の解釈については，次項でまとめる 4～8 号機に関する論説と共に行うこととして，本項を閉じたい。

■2．4～8号機のセカンドロット

前項では，初期型 RX-78 について解説を行ったが，本項では 4～8 号機について解説を行っていく。

4～8 号機は，素体のまま RGM-79 の母体となったことは前項で既に触れているが，同じく前項の引用５において，1～3 号機同様の実戦仕様に改修を施されていることも触れた。

すなわち，4～8 号機も RX-78-2 仕様という形で実戦投入可能な段階までは仕上げられていたということになるのである。（ただし，外装に関しては RX-78-1 仕様の形のままであった可能性は否定できない。[#47]）

しかしながら，実際に確認できる 4～7 号機の形状は，これら 78-1 仕様，78-2 仕様とは大きく異なったものとなっており，これら現在確認できる仕様の 4～7 号機を現在では「セカンドロット」機と通称している。

一度実戦仕様に仕上げられた 4～8 号機が，何故改めてセカンドロットという形で再設計されたかだが，これには 2 号機を運用したアムロ・レイ曹長(当時)の RX-78 の機能向上に関する要望があったと考えられる。

RX-78 は，連邦のもてる技術を投入したハイスペック機ではあったが，パイロットであるアムロの技量に機体が追いつけず，後にマグネットコーティングを施されることとなっている。

このマグネットコーティング作業が行われたのは，前項で記したとおり，UC0079/12/27 であるが，これはホワイトベース隊が実質的に囮部隊として作戦行動を取った結果，この時期になってしまったのであり，実際にはこの日よりも前にマグネットコーティング作業は可能であったと考えられる。[#48]（つまり，アムロとしては，機体性能に難点を持ったまま運用を続けていた事になるのである。）

マグネットコーティングについて，いつ頃理論と実際の機材が完成したかについての明確な資料は存在しない。しかし，一部資料に 11/14 に RX-78（時系列から見ておそらくこれは 3 号機であろう[#49]）にマグネットコーティングを行ったという記述が見られることから，3 号機の修復後に実際に実用評価が行われたと言うことは間違いないだろう。

3 号機のジャブローへの回収が，10/09 であるという結論を前項では出しているが，同様に，このマグネットコーティングの期日からして，3 号機の回収が 11/02 や 11/27 と考えるのが難しいことがわかるだろう。また，セカンドロット機の実戦配備時期を考えると，（セカンドロット機を生み出す原因となった）アムロの要望は，この 3 号機の回収の時点で行われていたと考えた方が無難であろう。

結果的にこのアムロの要望が，一度完成していた

[#47]
この文章は，現在稼働している各種ゲームに登場するプロトタイプガンダムやフルアーマーガンダムが，この 4～8 号機の RX-78-1 仕様，または，RX-78-2 仕様時である可能性があるためのぼかした文章である。
詳細は，本文後半でまとめているとおりである。

[#48]
これは，マドロックの実戦配備された時期が 11 月中であり，G-04，G-05 の実戦配備が，12/26 に既に行われていること，そして何よりも NT 対応型としてマグネットコーティングが施された NT-1 が，12/25 には損壊していることからもわかる。
逆に言えば，12/25 に NT-1 が損壊したからこそ，急遽 2 号機にマグネットコーティングが施された，とも考えられるのである。

[#49]
多くの資料で，3 号機はマグネットコーティングの試験に用いられたという形の解説が行われているため，こういった表現となった。

4 ～ 8 号機を再び改修し，新たな機体として生まれ変わらせることになったのは，間違いないと考えられる。
しかし，このアムロの要望とセカンドロットへの改修がいつ決定したかについてや，実際にどの機体がどういった形で実戦に投入されたかなどは，未だ完全な形の資料は存在せず，疑問点が残っていることも事実なのである。

具体例を挙げよう。

4 ～ 8 号機に関しては，引用 1 では「4，5 号機は実戦参加，6 ～ 8 号機に関しては参戦記録が残されていない」といった形で記述されている。その一方，引用 4 では，「4，5 号機は実戦参加，6 ～ 8 号機も参戦したらしい」という形の記載となっている。この 2 つの資料は，極めて古い資料であるが，既にこの時点で記述内容の相違が生じているのである。
また，後に公開された資料[#50]では，4 ～ 6 号機の実戦参加は確認できるものの，7 号機はフレームまでしか建造されず，8 号機に至っては完全に情報が無いという状態なのである。
つまり，この 3 つの資料ではそれぞれバラバラな記述となっているということなのだ。無論，いずれの資料も明確に事実を記載しているわけではなく，推察で記されたかのような記述となっているため，完全にバラバラと言うことはできないのだが，これらを無難に解釈するとした場合，最も的確な考え方は，「それぞれの資料が異なった時期に 4 ～ 8 号機に関して記している」という解釈ではないだろうか。

すなわち，引用 1 に関しては，4，5 号機を改装中という記述が見られることから，4，5 号機の改装中に情報を得ており，後（おそらく終戦直後）に編纂されたため，情報が不足していたことから，先の記述になったものと考えられる。
一方，引用 4 は，引用 1 よりも若干後にまとめられたため，6 ～ 8 号機の参戦事実があったという情報を得ていた，ということだろう。
最後の資料では，7 号機はフレームのみ建造されているという情報から，セカンドロットにのみ限定して記述された資料であると考えられるのである。
つまり，4 ～ 8 号機の記述については，少なくとも「ロールアウト直後の RGM-79 型の母体であった時期」，「RX-78-1 仕様，RX-78-2 仕様にまで改修された時期」，「セカンドロットとして改修・運用された時期」と 3 つの時期に分けて考える必要があると言うことではないだろうか。

ここで少々時間軸を戻して考えたい。

RX-78 の初号機ロールアウトは，UC0079/07/07 とされた資料が存在する。（ただし，ロールアウトをサイド 7 とする記述もあり，詳細は判っていないのが実情である。）また，サイド 7 での最終運用試験が UC0079/08 という資料も存在する。
これらは，資料があまり発見されていなかった時期の物であり，多少のミス等も存在する可能性は否定できないが，RX-78 が初めて MS-06 と戦闘を行ったのは，09/18 であることから，少なくとも 1 ヶ月の間は様々なデータ収集が行われていたことは間違いないのである。そして，V 作戦を経由しない形での RX-79 計画は，RX-78 の完成直後にスタートし，量産 MS の開発計画も同時にスタートしていること，UC0079/08 には RGM-79 の初号機が既にロールアウト[#51]していることから，この約 1 ヶ月の間に量産型 MS の母体としての役割を終えた 4 ～ 8 号機は，実戦仕様に改修されていたとしてもなんら問題は無いのである。
これを時系列的に示すと，下記のようになる。

（表 3：4 ～ 8 号機の仕様変更の経時）

時間軸	4 ～ 8 号機の仕様変更（赤字）
UC0079/07	・ロールアウト（初期試作型） ・RX-79 計画／量産 MS 計画開始
UC0079/08	・RGM-79 ロールアウト ・同時に 4 ～ 8 号機を実戦仕様に
UC0079/09	・サイド 7 で初の MS 同士の戦闘
UC0079/10	・小破した 3 号機，ジャブローへ ・アムロの要望がジャブローに ・セカンドロットへの改修はじまる
UC0079/11	
UC0079/12	・6 号機の実戦投入を確認 ・4，5 号機の実戦投入を確認

この表のように考えると，それぞれの仕様であった時期が特定されてくるだろう。

◇各機体ごとの機体仕様

ここでは，まず 4 ～ 8 号機のセカンドロット機体仕様に関してまとめてみよう。それぞれの機体ごとの解説を行い，セカンドロット機全てに関するまとめを最後に行うこととする。

[#50]
これは M-MSV **のこと。**

[#51]
後述するが，実はこの時期に G4 **計画もスタートしている。**
RGM-79 **の完成によって，**RX-78 **の一応の完成とみなされたのであろう。**
この計画と，4 ～ 8 **号機の計画がどういった形で並立したか，についてが，本論の重点ポイントと言うことになる。**

○ RX-78-4　ガンダム 4 号機（G-04）

4 号機は，宇宙戦用の高機動型として再設計された機体であり，ジオン軍に対する反攻作戦を考慮し，主戦場となる場所が宇宙であろう事から，重点を空間戦闘に絞って開発された機体である。アムロ曹長の要求に対する解答を空間戦闘仕様という形でまとめ上げた物がこの 4 号機ということなのだろう。

しかし，実際には陸軍の XX 型が地球上ではアムロ曹長の乗機として配備されることとなった（次項参照）のと同様に空間戦闘機としては，オーガスタ研主導で開発が進められていたニュータイプ専用機が配備されることとなり，この機体は一般配備向けの機体となっている。

同じプランとして進められていた 5 号機同様，反攻作戦のための主力機という位置づけになったのである。

この機体は，大型ビーム砲であるメガランチャーの運用を考慮し，さらにジェネレータの強化や冷却装置の強化といった改修が加えられている[#52]。（しかし，エネルギー CAP の容量の問題があり，運用が実現しなかったという説もある。）

4 号機は後にペガサス級サラブレッドに配備され，ア・バオア・クー或いはグラナダ戦線で運用されたといわれている。

○ RX-78-5　ガンダム 5 号機（G-05）

5 号機は，4 号機同様宇宙戦用の高機動型として再設計されている。当初公開された資料では，5 号機の運用プランについては，主武装としてハイパービームライフルが見られるだけであり，はっきりとしたものではなかったのだが，後年発見された資料では，大型ガトリングガンを運用しているのが確認されている。

このことから考えるに，仕様プランとしては，実質的に 4 号機と同じ物ではあったのだが，4 号機の大型ビーム兵器が実用にならなかったときの予備プランであった可能性は高いだろう。そのため，一般的な仕様としては同じ物ではあるのだが，4 号機がビーム兵器搭載のためさらなる改修を受けているため，図らずも「同じ仕様で開発が進められた機体でありながら，型式番号通りに仕様の違う」機体が誕生することとなったのである。[#53]

5 号機も 4 号機同様ペガサス級サラブレッドに配備され，ア・バオア・クー或いはグラナダ戦線で運用されたといわれている。

なお，この 2 機の運用については諸説あり，両機とも帰還したという説，4 号機のビームランチャーの暴発によりパイロットが死亡したため運用が中止されたという説，5 号機が大破し 4 号機が帰還したという説が存在する。

○ RX-78-6　ガンダム 6 号機（マドロック）

6 号機は，ビームライフルの弾切れ時などに火力の低下を補うために予備兵装を当初から搭載した形で再設計された機体である。しかしながら，本機の開発スタッフは，砲撃戦関連の技術者などが加わった結果，機体そのものはちょうど RX-77 型と RX-78 型の折衷案的な機体となっている。

RX-77 型は，比較的高い評価を得ており，量産案（RGC-80，RX-77D），改良案（RX-77-3，RX-77-4）などが検討されていた。しかし，量産案は実現した物の，改良案の方は，実質的には停滞していたこともあり，その改良案のノウハウも 6 号機には投入されたものと考えられる。

6 号機は，セカンドロット改修機では最もはやく実戦に投入された機体である。未完成ながらもジオン軍の第 2 次ジャブロー攻略戦においてジオン軍 MS の撃退のために起動しており，その後完全な状態で北米地区で運用されたことが確認されている。

[#52]
M-MSV の当初の説明を見ると，「4 号機にはメガビームランチャーを装備する予定であった。このために 4 号機のジェネレータ出力をさらにアップ～～」という記述が見え，後からメガランチャーが付け加えられたのではなく，当初から予定されていた仕様であることがわかる。逆に言えば，ジェネレータ出力のアップを行ったと言うことは，当初想定のスペックが出ていなかったものと想定される。

[#53]
蛇足ながら，M-MSV における機体デザインと，外伝における機体デザインの違いであるが，これについては，どちらでもかまわないと考えている。本文中では，外観に関してはあえて記述していないが，「シークレットフォーミュラ」と「宇宙・閃光の果てに…」のストーリーを考えるに，おそらくこれから公式として受け入れられていくのは，後者である。しかし，M-MSV の誕生の経緯を考えると前者も無視する事はできないのである。

ストーリー的には，「宇宙，閃光の果てに… if」同様，IF 分岐と考えれば，これから先，後者がデフォルトとなり，書籍等に掲載される 4 号機（あるいは 5 号機）の画稿もいわゆる G-04，G-05 の物になってくると思われる。（おそらくであるが，論説的には，「アクトザクと戦闘したとされているが，実際にはビグロの改良型だったという説もある」といった表記になると思われる。）マドロックと 6 号機のように，「仮に 2 機建造されていた」と解釈しても問題をクリアできる機体に対して，4，5 号機は，M-MSV 版と閃光版の機体が「実は同じ物」であることは，避けようがないと思われる。

だが，機体の仕様の違いもあるわけで，何らかの提示はしないことには，この考察の意味がない（笑）ので，機体デザインの差違については以下の提示をしておく。

「M-MSV 版の機体は，4，5 号機の仕様としてプランニングされた物であるが，実際にはコスト削減のため，様々な RX-78 型（あるいは，一部 RX-79 型）のパーツを流用した結果，現在（すなわち閃光版）のような，比較的ベースとなった RX-78-2（-3）型のようなプレーンな機体デザインとなった。」

また修復されたガンダム 3 号機と共にペガサス級ブランリヴァルに搭載されたという説（実際に搭載されたかどうかは資料では確認できない）もあり，時間的問題から，当初計画の初期型 RX-78 の 6 号機の改修以外にも複数機同時進行で開発されていた可能性も否定できない。
というのも，6 号機の武装をみるとビームキャノン搭載という記述と，300mm キャノン搭載という記述が存在[#54]するのである。また，ジャブロー攻略戦で確認された機体の完成体では，ビームサーベルがバックパックに装備されているのだが，開発プランとして確認できる 6 号機では，脚部に装備されているのだ。

また，6 号機プランの写真では，RX-78 の改修機であるといったニュアンスの機体となっているのだが, ジャブロー攻略戦で確認された機体の完成体は, どちらかといえばオーガスタ研主導で開発された NT 型の意匠に近いパーツが見られるのである。
そのため，前者は 6 号機から改修された機体であり，後者はこのプランを元に別バージョンとして同時開発された機体である可能性も否定できないのである。
残念ながら，この想定を肯定するような資料は存在しないため,「可能性がある」といった記述しかできないが，この 6 号機プランの場合，既存の MS 計画の発展型とも言えないこともなく，複数機存在していたとしてもおかしくはないだろう。

○ RX-78-7　ガンダム 7 号機

7 号機は，追加兵装によって様々な運用が可能な次世代機として開発が進められた機体である。
資料では「*設計段階で終戦を迎え，基本フレーム以外は制作されなかった機体*」という記述が見られるのみの機体であり，当時としては実現が厳しい機体コンセプトからして実際に実戦投入されたとは考えにくい。

しかし，この記述を逆に考えた場合,「すでに基本フレームは存在していた機体でありながら，未だ設計段階」という非常に不可思議な記述であることがわかる。
つまり，一般的に機体の開発は，設計が完了した時点で行われる物であり，設計を行いながら機体の建造を行うとは考えられないため，この記述は「セカンドロットとしては設計段階で終戦となり，実機は完成しなかった」と置き換えた方が正しいと考えられる。
つまり，この「基本フレーム」というものが，改修された RX-78-2 仕様の 7 号機を指しているのではないだろうか。（そうでなければ，前出の記述の場合「設計段階で終戦を迎え」が明らかに蛇足であり，「設計は終わったが，基本フレーム制作中に終戦を迎えた」といった形の記述になるはずである。）

このように考えると，現在確認できる 7 号機のプランは，いわば机上のプランとして提示された開発コンセプトに過ぎず，実機の改修は全く行われていなかったと考えられるのである。
しかし, 引用 4 に「6 ～ 8 号機も参戦したらしい」という記述が存在するため，改修されないままの状態，すなわち，RX-78-2 仕様の 7 号機のままで実戦に投入された可能性が指摘できるのである。

この 7 号機には FA プランとその発展型プランまで提示されているが，当時の開発能力から考えると明らかにオーバーテクノロジーの部分が存在する。終戦後に開発された RX-78GP03 が，このプランの内容を幾分含んでいるとも考えられることから，やはりセカンドロットとしての RX-78-7 仕様は，実機は存在していなかったと考えるのが妥当であろう。

○ RX-78-8　ガンダム 8 号機

8 号機に関するセカンドロットのプランは，現在に至っても確認されていない。これは，初めてセカンドロット機の姿が確認された「Missing MSV」と呼ばれる資料に至っても同様である。
この資料で，4 ～ 7 号機のプランが確認されている（7 号機に至っては前出の通り机上のプランでありながら記載されている）ことから考えると，8 号機の改修プランは，実は存在していないのではないかと考えられるのである。
つまり，8 号機の機番は，型式番号 RX-78-8 として抑えられていたのだが，その改修プランは実際には終戦には間に合っていなかったのではないか，ということなのである。
実際, RX-78 型の仕様としては, 既に一般的な MS の運用プランが出尽くしていると言っても過言ではなく[#55]，これら以外のプランニングが検討されている間に終戦を迎えてしまったのではないかということなのだ。
結果的に機番によって型式番号 RX-78-8 が仮押さえされていたため，このナンバーが一人歩きした

[#54]
前者は，ジオニックフロントにおける設定で，後者は M-MSV **における設定。そのため，**78-6 **番機は，**300mm **キャノンで，別に建造されたマドロックはビームキャノンという解釈を行う事もできるのである。**

[#55]
陸戦対応が，XX **型と** 79(G)**型，水中戦対応型が** 79M **型（サブマリーンは外しても問題は無いだろうが，一応記載）と** RAG-79G1**，空戦型が** E **型，ニュータイプ対応型が** NT **型，高機動空間戦闘対応型が** 4 **型，**5 **型，(結果的にだが）砲撃戦仕様が** 6 **型，そして，換装型（重武装型）が** 7 **型，と一通りの仕様は揃っているのである。**

ことが，RX-78-8 というナンバーを世に出したということであり，それに該当する仕様は無かったと考えるのが現在では妥当ではないかと考えるのである。

また，引用４の記述から，7 号機同様 8 号機も RX-78-2 仕様には改修されていたことは間違いないため，この状態で何らかの形で実戦に投入されていたと思われる。

残念ながら 8 号機の所在については，はっきりした記録が残っていない。しかし，戦後次々と発見された記録に様々な形で登場する「ガンダム」の中の 1 機が，実は 8 号機であった，という可能性は十分あり得るのではないだろうか。

特に別項でまとめている FSWS 計画に関する機体群に 8 号機が流用されている可能性はあり得るだろう。

◇セカンドロット機総括（機番と仕様番号）

前項で RX-78-1 号機～ 3 号機の機体仕様の変遷と型式番号の対応表（表 1）を示したが，4 ～ 8 号機に関しては，省略している。

前出の表はセカンドロット機の解説を行った後に改めて機体仕様と機番の説明をしたいと考えたため，あえて省略を行っていたのである。

実は，本論で最も重要なポイントをここで説明しなければならないと考えたからである。

（表１-1：型式番号と仕様名/対応表）

型式番号	対応する仕様
RX-78（無し）	初期試作型
RX-78-1	中間武装型
RX-78-2	後期試作型 3 号機仕様
RX-78-3	G-3 仕様 / MC 仕様
RX-78-4	空間戦闘仕様
RX-78-5	空間戦闘仕様
RX-78-6	砲撃戦仕様
RX-78-7	換装型多機能 MS
RX-78-8	不明

表 1-1 は，前出の表にとりあえずセカンドロットを表す仕様を加えてみた物である。仕様名が若干苦し紛れなのには理由がある。

つまり，これらセカンドロット機は，「明確な仕様名を示した資料が存在していない」のである。また，8 号機に至ってはセカンドロットとしての資料すら存在していないのである。

何故こういった形で提示したかというと，本論で最も重要な「型式番号＝仕様」だけでは説明がつかないという部分の一つがここで説明できてしまうからである。

一般的に仕様を分ける場合，機体の運用目的による仕様区分と改修による機体バージョンを表すための仕様区分が存在する。(両方を複合化する場合もある。)

RX-78-1 ～ 3 という仕様は，改修による機体バージョンを表すことは理解できるだろう。しかし，RX-78-4 ～ 7（明確に 8 型仕様は確認できないため，この様に表記する）仕様では，どちらの形で仕様番号を策定したか判らないのである。

表 1-1 では，筆者がとりあえずの仕様として区分分けしたが，これを細分化し，例えば 4 号機を空間戦闘仕様（高出力型）等といった形で表現することは可能だろう。

しかし，機体そのものを考えると外見が若干異なっていることと，ジェネレータの載せ替えが行われているという程度の変更に過ぎない。しかも，この変更は当初同型として開発された 4，5 号機において大型ビーム兵器を運用するために（結果的に）追加された仕様なのである。

このことから考えると，RX-78-5 の方が番号的に新しいため，高出力機として追加改修されたと考えるのが正しいのだが，実際には 4 号機が追加改修されているため，この型式は機体バージョンによる仕様番号ではないと言えるだろう。いや，そもそも 4 ～ 8 号機のセカンドロットへの改修は，並列的に複数のプランが実施されたため，機体の改修バージョンによる仕様番号とするには，あまりにも無理がありすぎるのである。[#56]

逆に，運用目的による使用区分を仕様番号として割り振ったとした場合，今度は 4 号機と 5 号機の似通った機体運用と機体仕様に関する問題がでてきてしまう。一般的な型式の命名法則に従えば，この 2 機の仕様番号は，RX-78-4A，RX-78-4B といった形で枝番処理されてしかるべきなのである。

詳細は後述するが，6 号機にも同様の問題点が存在する。開発時の 6 号機本来の開発コンセプトは砲撃戦仕様機ではなく，あくまで予備兵装の搭載にあ

[#56]
これが例えば，RX-78-5 ガンダム 4 号機，とか，RX-78-7 ガンダム 5 号機といった形の型式であれば，機体バージョンによる仕様番号と考えられないこともないが，少なくとも現実にはそうなっていない。

り[#57]，実は仕様としての形が後から付いてきたに過ぎないのである。また，機番と仕様番号が一致している点も，この運用目的による仕様番号という解釈にはやはりつらいだろう。

そこで先の引用６に注目してもらいたい。
この引用６では，1 号機～ 3 号機を表す言葉として，RX-78-1 ～ RX-78-3 が用いられているのである。つまり，明示的に RX-78-1 ＝ 1 号機，RX-78-2 ＝ 2 号機，RX-78-3 ＝ 3 号機と示されているのだ。同様に RX-78-4 ～ 8 も，とりあえずは機番であると考えてみるのである。

こういった論じ方をすると，単純に機番説を採っただけではないか，と言われてしまうが，ここからが本論のポイントである。

まず考えてみて欲しい。何故，機番説，仕様説がそれぞれ現れたのか。
これは，双方ともそういった形に解釈できる資料が存在している，という事なのである。従前の論説では，それぞれの記述の解釈を機番説，あるいは仕様説に双形で変化させていき，解釈としてどちらかの説に沿った物としていた。この方法だと，先述の引用６のような記述だと仕様説の解釈だと非常に問題点が多くなってしまい，切り捨てるべき記述となってしまう。無論，その逆の例も多々ある。つまり，保有している資料の種類や解釈によってどちらの説がでてきてもおかしくないのである。

ならば根本的な部分の考え方を変えるしかないだろう。つまり，「RX-78-1 ～ 8 というナンバーは，機番としても仕様番号としても存在している」という考え方である。実際，そのように考え，解釈を少々いじることでこれまで出て来た問題点の多くが無難に解釈できるのである。
つまり，まとめてみると次のようになる。（先の 8 号機の解説部分で軽く触れているが，その完全なものと考えて欲しい。）

RX-78は，ロールアウト時に1～8番機として機番登録された。（この際の登録ナンバーをRX-78-1～8というナンバーと想定する。）

1～3号機は，細かい改修を施されながら，実戦仕様のMSとして運用試験に回されることとなった。一方，4～8号機は量産型MSの母体となったのち，1～3号機同様の実戦仕様改修が行われることとなった。
この時点では，仕様番号としての型式番号は，2種類[#58]しか存在せず，実際，4～8号機もRX-78-2仕様までしか改修が進まなかった。

しかし，初期にロールアウトした8機以外の「ガンダム」の開発計画が，RX-78のロールアウト後にスタートしており，RX-79計画やG-4計画がそれに該当する。
あくまで別計画であったRX-79計画によるガンダムは，RX-79ナンバーを与えられており，仕様番号としては，全く別の物となっていたため問題とならなかったのだが，G-4計画の機体は，ルナツーで回収されたRX-78のデータを流用しているなど，V作戦機のデータを用いてプランニングされたため，（その機体のフレームが仮にRX-79ベースであっても）RX-78のナンバーが与えられることになったのである。また，これらの計画が進められている最中，RX-78の実際の運用部隊であるホワイトベースから，RX-78の機能改善に関する要望が提出されたことから，ジャブローのMS開発セクションでは，残されていた4～8号機と回収された3号機をそれぞれ新たなRX-78の改修型として再設計することとなった。

ここにおいて，他のRX-78プランとの差別化のために，初期8機をベースとしたプランに「機体番号と同じ仕様番号の型式番号」が与えられ，3号機～8号機ベースの仕様をそれぞれRX-78-4～8とすることとしたのである。（すなわち，機体完成よりも先に型式のみ与えられたということになる。）また，それ以外のRX-78タイプにはRX-78xxとアルファベットを用いた型式を与えることとした。このタイプの機体が，陸軍主導のRX-78XXタイプやオーガスタ研主導のRX-78NTタイプ，空軍主導のRX-78Eタイプということになる。後に建造されたガンダム開発プロジェクトの機体も，こういったルールに則ってプランニングされたため，型式としては，RX-78GPが与えられたのであろう。

このようにまとめると，実は機番説，仕様説に関わる問題点に関しては全てクリアすることが出来る。
仕様，機番どちらの考え方としても RX-78-1 ～ 8 というナンバーが存在することになるため，いずれの資料も成立するのは当然といえば当然のことではあるが，こういった発想が行いにくいのが歴史解釈の分野である。本論では，各々の資料の記述そのものが曖昧である点（RX-78-1 ～ 3 という仕様について明確に示した資料が存在しない点，セカンドロット機の型式が機番ではないと否定した資料が存在しない点，など）から，それらを両立する無難な選択を行ったに過ぎない。
しかし，現時点でどちらかの説に拘った場合に生じる矛盾点を全て解決するにはこの解釈が最も適当ではないかと考えるのである。

[#57]
これは意外と勘違いをしている人が多い。実際，ZEONIC　FRONT **で登場した際も，こういった説明がなされたため，現在では砲撃戦仕様機として認知されてしまっているのである。**

[#58]
ここで言う 2 **種類は，最初の改修型である中間武装型＝** RX-78-1 **と** 2 **番目の改修型である後期試作型＝** RX-78-2 **仕様のことである。初期試作型は，枝番無しの** RX-78 **と解釈する。**

■3．初期8機以外の78型及びRX-79型

さて，前項で本論の一番重要なポイントはまとめてしまっているのだが，引き続いて初期ロールアウトの RX-78 型 8 機以外の RX-78 型と，V 作戦を経由しないでプランニングされたと言われている RX-79 型についてまとめてみたい。

蛇足ともいえるが, この両系統をまとめることで, 一年戦争時に現れた「ガンダム」に関するデータは, おおよそまとめ上げることが可能となるためである。

◇ RX-79 型の開発系譜

RX-78 型 MS というのは，これまで述べてきたように，様々な経緯が入り交じって開発された機体である。

前項では RX-78 型において，型式番号をナンバリングする形で表したもの，すなわち，RX-78-1 ～ 8 というナンバーは，初期 8 機のナンバーを踏襲した物とした。

同様にアルファベット処理されたものは，この初期 8 機以外のプランとして開発された機体だという形で解釈を行っている。

実は，この解釈にもう一つ追加したいのである。

連邦軍の MS 開発計画は, V 作戦（RX 計画派生），RX-79 計画（RX-79[G]計画という記述も一部では見られる），G-4 計画などがあげられる。

しかし, 時系列から見ると V 作戦の発動後, RX-78 のロールアウトをもって RX-79 計画が UC0079/07 に発動し，G-4 計画は UC0079/08 に追って発動しているのである。また，他の量産 MS 開発計画と，これら RX-79 計画や G-4 計画との差違を考慮すると実際には RX-79 計画のなかの一つが G-4 計画であったと考えるのが妥当ではないかと考えられる。

というのも，G-4 計画は G-3 のデータを元に機体開発が進められたものであり，「G-3 実機を用いた計画」ではないのである。

また，一部資料において「RX-79[G]は，RX-78 の開発において，規格外としてはじかれたパーツ群を再利用した機体であり，パーツ間のバランスを取るためにリミッターが設けられている」という記述が見られることから，実際には「RX-78 として生産するのはかなり困難を伴った」ということが想定できる。逆に言えば，生産されたパーツのほとんどはロールアウトした 8 機の予備パーツとして使用され，実際に組み上げた場合に予定通りのスペックを発揮できないパーツ群が数多く残っただけ，ということも想定できるのである。

ここから類推するに，型式番号で RX-78 のナンバーを持つ機体でありながら，実際にはその全てが真の意味での 78 型ではなかった，ということであろう。

実際，連邦軍は，RX 型 MS のロールアウト後にスタートさせた RX-79 計画は，資料によって扱いが微妙に異なっており，複数の計画をまとめた物であった可能性は非常に高い。

つまり，「**V 作戦後の連邦軍全体の新型 MS 開発計画＝ RX-79 計画**」と考えられるのである。

現在，様々な資料で RX-79 計画の詳細が異なっているのは，実は，それだけ様々な計画が実際に進行しており，それぞれが各計画横断で行われていた「**（陸海空宇宙）各軍横断の全軍規模の計画**」であったためではないか，と考えられるのである。

つまり，V 作戦後の新型 MS 開発計画を RX-79 計画とし，この中での量産型 MS 開発プランによって進められたのが，RGM-79 の開発であり，その為の母体となったのが RX-79 の 1 プランである「プロトタイプジム」であり，陸軍主導で陸戦型の量産型 MS の開発計画が RX-79[G]計画という名の「RX-79[G]，RGM-79[G]開発計画」であり，その他の開発計画（後述）ではないだろうか。

そして，その RX-79 計画の中で「各軍対応型ガンダム」の開発プランで，既存の V 作戦のデータを元に進行された計画が「G-4 計画」なのではないだろうか。

この様に考えると，各研究所や陸海空軍それぞれで開発が進められた機体が V 作戦のデータを元に開発された機体を 78 型，そうでない機体を 79 型として登録していたと考えられるのだ。

実際，その可能性は非常に高く，それに類する資料も確認できるのである。[#59]（内容については後述）

ここで前出の「G ナンバー≠仕様」について，もう一度蒸し返してみたい。

前項ではセカンドロットの型式登録に際して，機番を元に登録したのが RX-78-4 ～ 8 という型式番号

[#59]
実はこう考えるに至った最大の理由が，陸戦型ガンダムの開発におけるプラン記述があまりにもバラバラである為である。
陸戦型ガンダムは V 作戦のデータを経由していない機体であるが，G-4 計画機は，原則として V 作戦のデータを経由しているのだ。
この点から逆算すると，実は海軍開発機だけ 79 ナンバーである点が疑問として上がるだろう。
実は，筆者としては逃げ道を用意している。つまり，型式不明のアクア・ガンダムこそが実は，RX-78 ナンバーの機体ではないかと考えているのである。こう考えると，アクア・ガンダムの機体設計をベースに RAG-79 をアップデートしたのが RAG-79-G1 ではないか，と想定できるのだ。
これまでの考察では，アクア・ガンダムとは RAG-79-G1 の別バージョン，と考えられていたわけであるが，ここを逆転の発想で，実はアクア・ガンダムこそ G-4 計画機であり，RAG-79 はその量産プランと考えてみたのである。

だと示した。そして，そのまとめ部分で「4 ～ 8 号機と回収された 3 号機をそれぞれ新たな RX-78 の改修型として再設計することとなった」と記述した。
実は，少々おかしな記述である。つまり，3 号機は単に改修されただけであり，再設計までは行われていないと考えられるからだ。
しかし，あえて前出のまとめはこういった形でまとめているのである。この時期，実際にジャブローには 3 ～ 8 号機が存在したこととなり，3 号機もアムロの要求に対する改修プランが実施されている。ただ，その改修プランが，モスク・ハン博士が持ち込んだ機体の追従性を上げるための改修案であり，「それを実施するための再設計が必要なかった」ということなのである。
先に「G ナンバーは仕様ではない」ことをまとめ，実際には「G-3 仕様」という言葉が存在することから，この仕様は後に追加した仕様である，という形に集約した。つまり，このマグネットコーティングを最初に施した機体が G-3 であったため，マグネットコーティング仕様のことを「G-3 仕様」とするようになったということなのである。

このように考えると，「G-3 仕様」は，機体そのものを指す言葉ではなく，マグネットコーティングを施した，すなわち，「RX-78-3 仕様に準拠した仕様」というものではないだろうか。

実際，この解釈は，あながち間違いとは言えないと思われる。というのも，RX-78NT-1 の開発中の写真[#60]が確認されているのだ。この写真では，NT-1 に改修中の機体がメンテナンスベッド上で作業されている様子を撮影した物なのだが，この機体の頭部アンテナ部分に「RX-79　G-Ⅲ」という記述が見られ，肩には「3」のナンバーが見られるのである。
G-Ⅲという表記は，おそらく G-3 仕様を指す物と想定され，肩の「3」は，機番を示す物であると想定されるのである。
つまり，NT 型は，RX-79 型から改修され，RX-78 型の派生機として再登録された機体ではないか，ということが，この写真から読み取れると思うのである。

また，RX-79[G]には，RX-78 の建造の際に生じた規格外パーツや余剰パーツを利用して建造されたという記述が見られる。

これから想定するに，[G]型同様に，RX-79 型として複数の機体がロールアウトし，存在していてもおかしくはないのである。
そして，陸戦型として設計された[G]型は，それ相応の設計変更を行われているのに対して，汎用型として計画されたであろう RX-79 型は，パーツ精度やパーツそのものが完全に揃っていないことを除けば，「基本的に RX-78 型と同型」と考えられるのである。

さらにこの考えを肯定するに足る資料が存在する。

「*連邦軍の RX スーツは大戦終結によってストップがかかったが，計画案としてニュータイプ用の完全型 GM と，残された RX-78 のフルアーマー化が存在したと言われている。*」[#61]

この記述は，初期の資料のひとつに見られる内容なのだが，ここで記述されている「計画案」は，後述するフルアーマープランの資料などから，実際には実行されていた可能性が高いと現在では考えられている。
それ故に，ここで記述されている「ニュータイプ用の完全型 GM」とは，（当時の資料では，RX-79 という機体は，RGM-79 のプロトタイプと考えられていたこともあり，）実は RX-79 から改修された NT 型である可能性が高いのである。[#62]

また，フルアーマープランに関しても，FSWS 計画がプランニングされた時点で，装着できる機体の数だけ生産されることになったとされているが，実はこの FSWS 計画の発動時には，RX-78 型で，これを装着できるのは，2 号機と 3 号機だけになっているため，事実上 RX-78 型が追加生産されていた，という事実が存在しなければかなりの不整合が生じてしまうのである。
そのため，FSWS 計画の資料における「残された RX-78」という記述は，「残された RX-78（型の機体）」と補足を入れ，RX-79 ベースで建造された機体を指すと考えた方がより肯定的ではないだろうか。
特に，FSWS 計画による増加装甲装着機である，FA-78-1 はハインツ・ベア搭乗機を始め，様々な機番の機体が確認され，さらに，リボーコロニー周辺

[#60]
NewType 88/11 **の出渕裕氏のイラストのことである。**
イラストの概要については，本文中に記載したとおり。
実際には，このイラストが企画されていた時期には，アレックスは 3 **号機という認識があったことも事実で，その後の紆余曲折を表している一つの例だと言えるだろう。**

[#61]
「MSV **ハンドブック** 1**」より。**
同様の記述は，他にもみられる。

[#62]
この機体は，RX-81 **を指す可能性も否定出来ないが，**RX-81 **が「ガンダムの完全量産を目指した機体」であるからには，白紙に戻された** RX-81 **プランというよりは，**RX-79 **ベースの** NT **型と考えた方が，都合はいいかと思われる。**

で確認されたとされる機番無し機なども含めると，「存在しなかった」とは，言い難い状況になってきている。
そのため，RX-78 型の追加生産を記載した資料が存在しないことと，引用１の「*ジャブローで製作された RX-78 の総数は 8 機*」という記述を否定できうる新たな資料が発見されない限り，これらの機体は RX-79 型であると考えるのが無難ではないだろうか。[#63]

さらにこの想定を裏付けるかのような資料が存在する。先の NT 改修機の写真が掲載されていた資料に掲載されている MS 開発経緯に関わる年表がそれである。
これを抜粋し，まとめると以下のようになる。[#64]

（表 4：MS 開発タイムライン）

年月	事柄
0079/08	RX-78 完成後，RX-78 タイプの強化型 MS（後にアムロが使用することになるガンダム 2 号機，3 号機）が開発開始される
0079/10	2 号機完成，テストパイロットの手でデータ収集がされる 3 号機はマグネットコーティング導入されたため完成が遅れる
0080	唯一完成した G Ⅲ 1 号機は終戦後，連邦軍自身の手によって解体される

ご覧になってもらうと判るのだが，UC0080 年の記載は，NT1 の解体についての記述である。正規の年表で確認するとこの事柄は UC0080/01 に確認することができる。また，先の写真の描写から，G Ⅲ 1 号機が NT 型（おそらく NT-1 であることは間違いないだろう）を示していることは明らかである。

また, この記述からすると RX-78 型のガンダム 2, 3 号機の開発が，UC0079/08 に開始されたことになっている。しかし，表３でも示しているが，初期型 RX-78 は，8 機とも UC0079/07 にはロールアウトしているのである。

つまり，ここでいうガンダム 2，3 号機は，アムロが搭乗した RX-78-2（2 号機）や G-3 ガンダムとは異なった機体であると解釈するのが妥当だろう。

ここで年表を顧みると，UC0078/08 にはオーガスタ研の NT 型の開発が開始されているのである。すなわち，多少の時期的差はあったとは思われるが，G-4 計画がスタートしたのが，この UC0079/08 だといえるのである。
つまり，「RX-78 タイプの強化型 MS」とは，G-4 計画における機体を示すのではないかと考えられるのである。[#65]

さて，アムロが使用する「はず」だった機体といえば，まず RX-78NT-1，そして RX-78XX である。いずれの機体もアムロ用として用意されながら，実際には彼の下へは届かなかった機体である。
NT-1 は，リボーコロニーにおける戦闘で損壊し，後に解体されており，また，XX は，ゴビ砂漠における戦闘で存在している。
すなわち，先の表４の 2 号機，3 号機は，これらの機体を表しているのではないだろうか。また，RX-79 計画の一つのプランとして G-4 計画があると，先に提示しているが，その前提で考慮すると，ここで示される 2 号機，3 号機以外の機体，すなわち 1 号機とは，RX-79 計画による機体であると考慮できるのである。

ここで疑問点が生じると思うが，それについてもフォローしておこう。G-4 計画では，陸，海，空軍および NT 対応型ガンダムが開発されている。
ここでは，2，3 号機について，このうち陸軍機と NT 対応機であることは想定できるが，空軍機と海軍機はどうなるのか，という点である。
実は，その点については，明確な資料が無いため推察しかできないのである。筆者の推察では，G-3 のデータを入手できずに開発を進めていた空軍と，同じく独自にジムタイプからのガンダムを建造していた海軍は, この 2, 3 号機プラン以降の(例えば)4, 5 号機プランなどとして進められていたのではないだろうか。

そして，1 号機プランこそが，いわゆる RX-79 計画のベースラインとして開発された機体ではないかと想定できるのである。つまり，1 号機プランを

[#63]
なお，MIA データシートでは，「8 機ほど」と濁されているが，現時点では，可能性だけであり記述内容を覆すだけの物ではないと考えているため，「ほど」が言及する機体を RX-79 型を生み出した余剰パーツと想定している。

[#64]
この年表は，一文字突破氏の協力による。
mixi の突破氏の話題は，この部分に係ると思われる。

[#65]
ここで，RX-78 型のセカンドロットという線も考えられないことはないのだが，実際にはこの改修作業は，UC0079/10 にスタートしたとしか考えられない（本文前出）ため，除外している。

RX-79 計画における全体的なプランと考え，2 号機プラン以降を G-4 計画機と考えるのである。この様に考えると，1 号機プランの機体は，79 ナンバーを冠した機体であり，G-4 計画機は 78 ナンバーを冠した機体としての区別も可能となるのだ。

従って，先述の表４の「後にアムロが（中略）2 号機，3 号機」という記述は，2 号機プラン，3 号機プランを意味していると考えられるのである。
つまりは以下のような流れに修正できる。

1	RX-78 が完成し，量産型 MS のプランと規格外パーツなどを利用した計画が立案され，RX-79 計画としてスタートする 0079/07
2	強化型 RX-78 タイプの開発計画，G-4 計画が RX-79 計画の一環としてスタートする。RX-79 計画を 1 号プランとして，陸軍プランを 2 号機，NT 対応型プランを 3 号機プランという形で追加する。空軍，海軍プランも同様のナンバリングを受ける。 0079/08
3	1 号プランで完成した宇宙戦用(汎用)の RX-79，陸戦型の RX-79[G]などから派生型（BD や FSWS）がプランニングされる。

1 号プランは，RX-79 計画そのものであり，完成した機体は，RX-79[G]や，宇宙戦用の RX-79（または，RX-79[E]（79[E]については，現在確認することはできないが，宇宙戦用 RGM-79[E]の存在から，完全に否定はできない）や RGM-79 のプロトタイプとも言われている RX-79 などが挙げられる。
この宇宙戦用に開発されたタイプの機体は，いわゆる RX-78-2 仕様とも RX-78-3 仕様とも受け取れる形状をしている機体が中心であり，その派生機として RX-79[G]の様な，独自の設計が施された機体があったと考えられる。
つまり，通常の RX-78 に類する外見をしている機体も多かったため, 地球上の各戦線で確認された，“連邦の白い奴”は，いくつかの事例はこの RX-79 の 1 号プランであると考えられる。また同時に，幾つかの機体は, そのまま戦線へと送られたり, RX-78 の代替機としてフルアーマーガンダムやガンダム G ダッシュといった形で運用されたと考えれる。
また，陸軍が開発した陸戦プランの機体は，陸戦に対応した機能，形状に再設計されていると考えられるのである。

一方 2 号プランは，3 号プランとの兼ね合いで考慮するといち早く完成し，テストパイロットがデータ収集していたことから，ゴビ砂漠へ輸送され，オデッサ作戦時のホワイトベースへ届けるための機体として用意された RX-78XX であると想定できる。
XX 型は，陸戦に特化した機体として G-3 のデータを流用し，改修が施されたプランとして，RX-78 ナンバーで再登録され，機体そのものは RX-79 型用として用意された RX-78 の規格外，あるいは余剰パーツによって建造されたと思われる。脚部アンクルガードの形状などは，RX-78-1 仕様の形状に近く，そういった余剰パーツがベースとなっていると考えられる。
XX 型は，陸戦における瞬発力は RX-78-2 を超える機体として完成したため，総数 3 機が建造されたうちの 2 号機は，ホワイトベースのアムロ・レイ用に搬送されることとなったが，先に示したようにゴビ砂漠の戦闘で損壊し，結局届くことはなかった。
なお，このゴビ砂漠の戦闘は，UC0079/10/09 であり，先述したホワイトベースから G-3 が回収された日に起こっている。従って，この機体にはマグネットコーティングは施されていない物と推察され，ルナツーで得られた G-3 のデータのみで建造された物であると考えられる。[#66]

同様に 3 号プランは，マグネットコーティングのため完成が遅れたという記述から，改修された RX-78-3 号機のマグネットコーティングのデータを待っていたために完成が遅れた NT 対応型であろうことが想定できる。
この 3 号プランが, 先に示した写真の機体であり，前出の表４の G Ⅲ 1 号機とは，NT-1 を示す物と考えられる。
この NT 型は，ニュータイプ対応機として建造が進められた機体ということであるが，連邦軍がニュータイプに関する認識を得たのが，事実上オデッサ作戦の頃であると思われる（アムロら，ホワイトベースクルーの戦果がなければ，ここまでは認識されなかったはずである）ことから，当初は RX-78 の次世代型 MS の開発プランをジャブローの RX-81 プランとは別の形で推進した物だと考えられる。[#67]
そのため，当初プランでは反応速度などの改良型の

[#66]
実は，ピクシーはマグネットコーティングが施されていないと考えると実に都合のいい機体なのだ。
ピクシーは，陸戦における瞬発力は RX-78-2 **以上と言われている機体である。これがマグネットコーティングによる反応性の総体的向上ではなく，瞬発力という限られたスペックの向上である点は「陸戦に特化した結果」と考えると都合がいいのだ。**

[#67]
これは，一文字突破氏がホビージャパン誌で発表したジムカスタム試作型について，本サイト内で設定考証を行った際に， RX-79N **という型式とし，**N **は次世代（**NEXT**）を表すと，提案したことがあるのだが，これをここに引っ張ってきている。**

ガンダムといった機体であったのだが，G-3 のデータと，マグネットコーティングの技術投入により，ニュータイプの反応速度に対応できる機体，すなわち，ニュータイプ対応機として RX-78NT として再登録されたと考えられる。
筆者の推測であるが，この次世代機としての初期状態の姿こそ一部資料で見られる赤い NT-1(通称 NT1 プロト)ではないだろうか。
なお，NT 型は，通常型コクピットの NT-2，78-1 番機の初期塗装に近い NT-3 と 2 〜 3 番機も確認できるが，それらの機体の詳細は不明である。また，アムロ・レイに引き渡されるはずであった機体も，12/25 のリボーコロニーにおける戦闘で損壊しており，結果的に引き渡されることはなかった。(蛇足ながら，この NT-1 の損壊により，アムロが要望していた反応速度の向上は，急遽 RX-78-2 にマグネットコーティングを施すことで，対応が成された物と考えられる。)

空軍プランと海軍プランに関しては，前述したように資料不足であるため 4 または 5 号プランとしていずれが該当したかは不明である。

海軍プランは，RX-79M ガンダムサブマリーンと言われているが，海軍では RAG-79G1 水中型ガンダム，アクア・ガンダム(型式は不明)といった他にもガンダムタイプを開発している。これはジオン軍の水陸両用 MS に苦汁をなめさせられたことから，G-3 データの流用によるガンダムタイプだけではなく，ジムの改良型など様々なプランニングを実行していたと考えられる。
先述した G-4 計画機が型式に 78 を冠した機体という考え方からすると，実はアクア・ガンダムこそ G-4 計画機であり，78 ナンバーを冠した機体であると考えられるだろう。(おそらく，RX-78M または RX-78A といった形のナンバーではないだろうか。)

空軍プランは，宇宙軍と空軍の不仲が影響したプランとも言われている。開発された機体は，RX-78E GT-FOUR がそれで，宇宙軍から G-3 のデータが提供されなかった空軍は,提供されたパーツ群を元に,独自にジェットコアブースターなどの既存の技術をベースとした機体を建造した。
他の G-4 計画プランがコアブロックを取り除く方向性であったのに対して，空軍プランはコアブースタータイプの発展型として，後の TMS(トランスフォーマブルモビルスーツ)の原型とも言うべき，簡易変形機能を持たされ，ブースターモードから中間形態，MS モードへと変形が可能となっていた。
しかしながら，このプランではあまりにも要求されるテクノロジーレベルが高く，都合 6 機（ブースターモードと簡易変形プランの試験機が 3 機，実用試験機が 3 機）が建造されているが，実質的には実用レベルになったとは言いがたい機体であった。

以上のように，G-4 計画は，RX-79 計画から派生し，それぞれの開発プランにおいて次世代機の開発が進められたが，1 号プランからもそれぞれの派生計画が進められている。先に示した RX-79[G] 陸戦型ガンダムもそういったプランの一つであり，量産型 MS の開発プランとしての RX-79 などとは異なった形で,RX-79[G] 計画として立案されている。さらに，この機体を利用し，RX-79BD 型が開発されるなど，複数の派生プランも存在したとされている。(先に示した FSWS 計画なども一つの派生プランとも言えるだろう。)

こうして考えると，RX-78 そのものは，実質的に初期に建造された 8 機だけである可能性が極めて高い。
だが，生産されたパーツ群は，実際にこの 8 機を稼働させるに足るだけのものではなく，それ以外の予備機(建造されるとした場合)や要求規格外のパーツなどを含めると相当数に上った物と考えられる。実際，RX-79[G]だけでも 20 機余りは生産されていたと言われており，かなりの 78 型パーツベースの機体が存在していたことは間違いないであろう。

また，NT 型は，既存の RX-79 からの改修だけではなく，後にオーガスタ系と呼ばれることになるように，独自のパーツ群も開発を行っていたことが判っている。これは，NT 型そのものが機能向上を前提とした特殊な設計であったため，既存の RX-79 からの改修によるものだけではなく，NT 型の様々な派生型としての仕様が想定され，それぞれ建造されたことにも端を発していると思われる。

結果的に，RX-79 ベースとはいいながらも全く独自の機体として完成したのが NT 型であり，その設計の際に得られたデータは，RX-76-6（一般的に 6 号機として認知されている機体ではなく，マドロックと呼ばれる機体のほうである）や，RGM-79N といった戦後の高性能タイプのジム，また，その開発の経緯から MRX-002 というニュータイプ研究所の研究機のベースともなっているのである。

また，NT 型によって得られたデータは，後の連邦軍の MS 開発計画に大きな影響を与えたことは事実で，この点からも「大きな分類としての RX-79 計画」は，連邦軍の新型 MS 開発計画全体を指していると考えた方が無難だといえるだろう。

■終わりに

ここから，論文調から筆者の個人的考察へと記述を戻す。

つらつらと書き連ねてきたが，RX-78 型の機体の型式番号における，78-4 以降の仕様としての番号と考えたときのバランスの悪さは，一般的にいわれている，「4 番目の仕様だから 78-4」という考え方ではなく，機体登録番号 78-4 の機体が，最終的に目指していた仕様が RX-78-4 という型式番号になった，と考えると非常に収まりがよいことが判ってもらえると思う。

この考え方だと，RX-78-8 という番号だけ存在していて，実際の仕様が明かでない番号が存在していても，その仕様番号と仕様の不一致も問題とはならないのである。また，6 号機の存在が仮に複数であっても，それぞれが別機体であるという解釈が可能となるため，論説上は問題とならないのである。[#68]

RX-78 に関しては，これから先も様々な新事実が発見されるであろう。しかし，近年の作品の傾向からすると旧来の資料が完全に否定されることは無いものと思われる。ただし，これから先様々な作品が製作されていく過程で，ガンダムが増えていくことはあっても減ることは無いのである。

しかし，旧来の資料を完全に否定されることがないと考えられると言うことは，逆に言えば，すくなくとも初期に建造された 8 機の RX-78 以外の機体は，何らかの追加生産された機体であるという解釈を行うしかないのである。現在アミューズメントセンターで稼働中のゲーム「修羅の双星」では, RX-78-1 や FA-78-1 がゲーム中に登場することがわかっている。「ゲームだから」と簡単に切り捨てることができないのは，近年のゲーム作品の設定面での充実からすると明らかであり，この作品に関しても新しい設定が公開される度にこの論説そのものが変更される可能性も否定できないのである。

「修羅の双星」では，これら RX-78-1 や FA-78-1 だけではなく，本来 4 機（あるいは，FMS まで考慮すれば 5 機だが）しか存在しないはずの MS-06R-2 がプレイヤー機として登場することがわかっている。この機体がいかなる経緯で生産されたのか(或いは，既存の機体がユーザー機として配備されたのか）が公開されなければ，不整合面が残った状態が続いているだけに過ぎない。

現時点では，この RX-78-1 や FA-78-1 は，RX-79 ベースの機体であるか，初期 RX-78 の 7 号機，または 8 号機であるという解釈しかできない。これに関する結論も保留という状態なのである。

今回，本論を再び修正した最大の理由は，前回までの論説で不都合があった部分を焼き直ししたことと，これら修羅の双星などハーモニー・ガンダム関連の機体設定が公開された際に，それらに対する解釈を投入できるよう論説の柔軟性を上げるためである。

結果，従前の論説に比較するとより安定感の強い論説になったとは思うのだが，新たな問題点が出て来たことも確かなのである。

無論本説は，本サイト（というか，筆者）の独自の暴論に過ぎない。従って，これが真実だと主張するつもりはないし，また，そうあること自体，ほんらい間違ったことである。しかしながら，既存の資料の紐解き方としては，一つの方向性を示すことができたのではないかと考えている。

もちろん，賛成意見，反対意見があったら積極的に提示していただきたい。その意見に対して，こちらとしての解答が示されない場合，この論説は完全に崩壊してしまう。それだけに筆者としてもそれら意見に対応するための資料解釈が必要である。また，新たな解釈論を提示できる機会もあるかもしれないのだ。

なお，「仕様説が通説だから間違い」などといった，非建設的意見の場合，筆者としてスルーする可能性は高いのでその辺はご了承頂きたい。

■本文引用資料について

[資料 1]
1/144 プロトタイプガンダムインストラクション

[資料 2]
RX-78-1 プロトタイプガンダムメカニカルファイル

[資料 3]
MIA プロトタイプガンダムデータシート

[資料 4]
1/60 PG ガンダムインストラクション

■参考

●プロトタイプガンダムのメカニカルファイル
このファイルに関しては，限定配布物であった関係で，現在では入手が困難となっている。
そのため，本文内容の記述内容の精度アップのため，全文引用の形を取らせていただいている。（さすがにまずい部分もあるかと思うため，場合によっ

[#68]
すなわち，初期の RX-78-6 **号機から改修された物が，**M-MSV **版の** 6 **号機であり，**RX-79 **ベースの** 6 **号機がマドロックと解釈できる。**

てはこれを削除した状態での再公開もあり得るので，ご了承いただきたい。）

◇メカニカルファイル(表)

「AAA」として秘密裏に進められた連邦軍のモビルスーツ開発計画で生まれたのが, RX-75, RX-77, RX-78 の 3 種のモビルスーツである。開発順位はそのナンバーより追うことが出来，最終的に完成した RX-78 をもって，連邦軍は初めてジオン MS 技術を上回る兵器を完成させたと言う事ができる。

RX-78，通称ガンダムは連邦軍ジャブロー基地において開発が進められ，母体と呼べる物は総数 8 機が製作されている。1 ～ 3 号機はルナツー基地へ輸送され，熱核反応路の強化，冷却システムの増強という改修工作を施されている。

ガンダムの標準兵装は，すべて外装式を採用しており，戦闘状況に合わせた選択が行われる。通常装備としてシールド，ビームライフル。固定武装としてビームサーベル，60 ミリ機関砲 2 門を持つ。

◇メカニカルファイル(裏)

RX-78 の名を冠して製作された 8 機のガンダムの内，1 ～ 3 号機は改修工作と実用試験のためルナツーへ運ばれた。これらは呼称として G-1 ～ G-3 ガンダムという名が与えられており，G-2 はホワイトベースへ搬入，ニュータイプパイロット アムロ・レイ少尉によって数々の戦績を残している。G-1 は奇襲攻撃で失われ，G-3 は後にフィールドモーターにマグネットコーティングを施した形で実戦参加している。

残る 5 機はジャブロー工廠から宇宙へは運ばれず，RGM-79 生産のための母体となったが，後に G ナンバーの仕様に武装されている。4・5 号機はサラブレッドに搭載，残る 6 ～ 8 号機も参戦したらしい記録が確認されているが，実際にどの程度まで仕上げられて実戦に投入されたかは実機が回収されていないため，不明である。これらの試作機は実働途上だった FSWS に参入される予定もあった。

連邦軍モビルスーツ（編註：原文は,「もビルスーツ」と誤植）の技術的に優れていたのは，そのコクピットブロックが，変形可能なライフポッドとなっていた点で，これ自体戦闘機状態に変形する事も可能であった。また装甲はセラミックと発泡金属のハニカムによる三重装甲で，衝撃吸収度を高くし，また被弾箇所の交換がユニット化されていた。さらにエナジー CAP 方式のビームライフルを標準兵装としているため，発射数こそ限られていたが，巡洋艦なみの破壊力を持つモビルスーツとして完成していた。この機体のコストパフォーマンスを考慮して製作されたのが，大量生産型 RGM-79 ジムである。

■更新履歴

H16/07/18	-	Rev.1.00	-	旧 MS コレクション解説より，新説/珍説ブチ上げま Show!に移動
H16/08/11	-	Rev.1.50	-	テキスト形式のまま，旧解説に，新規解説部分を追加
H16/08/12	-	Rev.1.51	-	第 1 項に追記（一部公開）
H16/08/22	-	Rev.1.70	-	RTF 型式へ変更，全般的に追記（非公開）
H16/08/28	-	Rev.1.71	-	全般的に追記（非公開）
H16/09/03	-	Rev.1.74	-	全般的に追記（非公開）
H16/09/10	-	Rev.1.80	-	RTF 型式から HTML 形式へコンバート
H16/09/16	-	Rev.1.81	-	第 3 項を追記
H16/09/20	-	Rev.1.82	-	第 3 項を追記
H16/11/11	-	Rev.2.00	-	完成版として公開
	-		-	
H18/11/29	-	Rev.2.01	-	PDF 版として全面改定（非公開）
H18/12/14	-	Rev.3.00	-	誤字脱字等の修正，Wiki 内にて公開
H19/07/24	-	Rev.3.02	-	フォント修正版（細かい改訂部分も存在する）

Rev.3.00 を持って，旧バージョンからの改訂を一旦終了する。

以降，本バージョンのバージョンアップのみに移行し，旧バージョンは，本館過去ログからのリンクのみとする。

■SPECIAL THANKS（順不同）

※皆さんの掲示板での投稿や，mixiでの意見交換などが作成に大きな力を与えてくださいました。

・一文字突破さん
・カセクシスさん
・ギムGさん
・九羅星さん
・ゼノタさん
・だっちんさん
・BASARAさん

■その他

サイト内における他の考察は，以下のものを始めとして多数が現在閲覧可能です。
機会がありましたら，他のものもご覧になってください。

・アクシズナンバーの謎？
・シャイニングフィンガー
・百式の開発における謎？
・2種類のFD-03が存在？
・ガザDの色はピンクか？
・ペガサス級ハルナンバー
・異端のMS群～ジオニックの陰に隠れたMSメーカー

ガンダム用語の〔似非〕知識
http://gudamer.sakura.ne.jp/wiki/wiki.cgi/GUNDAM?page=FrontPage

■最後に

ご一読ありがとうございました。
限定公開!実験場の管理人，あさぎりです。

枕で語りましたが，この本はこれまでのサイトでの考察展開とは異なった方法で提示しています。
最大の理由がやはり前回同様，分量が半端ではなくなった，ということだったりします（苦笑）
（なぜPDFにしたかについては，枕で語ったレベルのものしかありません。詳細が知りたい方は，前回のファイルの後書きをご覧になって下さい。）

今回のファイル作成における目標の一つが，GUNDAM OFFICIALS的な高密度文書として仕上げてみるというものでした。最終的に，OFFICIALSにはかなわないまでもそれに匹敵するような文章にまとめられたら意図したところは成功だったのではないかな，と考えています。（何せ，筆者はバリバリの理系人間なので，文章的におかしな所も多々あるかと＾＾；）

また，今回は前回PDFの制作において手探りであった部分を，様々に変更しています。いずれもまだトライ&エラーの域を抜け出せませんが，メインで使用している一太郎2006のDTPモードの機能を様々テストしているといった段階です。（故に今回は，機能としての「脚注」を使ってみました。）
とにかくワープロで凝った文章（HTMLで普通にできない縦倍角や横倍角，行途中のイラスト挿入など）を行っても，それがそのままファイルになるというのは，なかなかおもしろい物です。
前回の後書きでも触れていますが，同人誌活動を行っていた頃の楽しさを思い出しながら「ああでもない，こうでもない」とまとめてみました。
様々なご意見等ありましたら再び文書内をいじり倒してみたいと考えていますので，積極的にご意見は下さい。

次回がありましたら，色々な人に参加してもらいたいと考えてます。あなたもどうです？（笑）

奥　付

発行日：平成 19 年 7 月 24 日発行 Rev.3.02

発　行：限定公開！実験場
（http://www.synapse.ne.jp/mist-a/）

編　集：あさぎり

※注意※
本書の内容は，独自解釈に基づく物であり，すべてが機動戦士ガンダムシリーズにおける公式な物ではありません。

本書の内容の無断転載を禁じます。
転載希望等ありましたら，上記サイト内掲示板へその旨連絡をお願いします。よほどのことがない限り，拒絶することは無いかと思います。
内容に関する質問等も同じ掲示板でお願いします。